

仿製三角縁神獸鏡の研究

——同範鏡にみる範の補修と補刻——

八 賀 晋

- 一 はじめに
 - 二 同範鏡の鑄造と範型の様相
 - 三 結語
- 一 はじめに

三角縁神獸鏡には同じ範型から鑄出した、いわゆる同範鏡が多数の型式にわたって存在することは良く知られたことである。また、この同範鏡の分有関係が、古墳時代初期の大和政権の成立と地域支配の関係に重要なかわりあいをもったものであるとする小林行雄氏の考え方も一般的となっている。三角縁神獸鏡には鏡背文様の構成や表出された図様や文字の形態、材質などから、中国で鑄造され日本に舶載されたいわゆる中国鏡と、中国鏡を母胎にして日本で鑄造したいわゆる仿製鏡の存在が指摘され、それぞれについてその歴史の意義が論ぜられてきた。近年、王仲殊氏の論説にみるように、中国鏡についてはその製作の工人並に製作故地について、これまでの見解と異なる点が指摘されてきている⁽¹⁾。

三角縁神獸鏡が何処で、どの工人によって製作されたかはともか

く、この鏡には中国鏡と考えられた一群および仿製鏡には、型式によって枚数の差こそあるが、同じ範型から製作されたと考えるのが妥当である鏡が数面づつ存在するのは厳然とした事実である。

同じ図文の鏡がどのような範型で、どのような経緯をへて作られるのかについては、その結果の反映である鏡背文様の分析から、いくつかの研究がなされている。同じ範型からつくられるいわゆる同範鏡という考え方は、研究者によって若干の考え方の差があり、一部を除いて、おおかたの考え方は、砂型によっては数面の鏡の鑄造は不可能であり、従って原型から多くの鑄型をつくって一面ずつ鑄造する、いわゆる同型鏡の考え方、また、基本的には同型鏡の場合と同じであるが、一つの原型から範をつくり、これから鑄造する踏返しの考え方もあり、これらが同図文の鏡の鑄造に一般的であったとする見方が支配的であるともいえよう⁽²⁾。

こうした原型の鏡から一回ごと範をつくって一面ずつ鑄造してゆく同図文の鏡の製作という考え方に對し、同図文の鏡の文様にみられる範型に起因する傷痕、剝離痕やその補修痕を、各鏡間の文様にみえる損傷の度合から、同範鏡の製作の過程がどのようなであったか推考されている例もある⁽³⁾。

近年、京都国立博物館で、仿製と考えている三角縁獸文帯三神三獸鏡を館藏品に加えたが、同型式の鏡は、本鏡を加えて実に九面の鏡が同じ図文で構成されることになり、我国でこれまでに確認されている同図文の鏡としては、最も多い面数となった。各地に保管されている同型式の鏡を詳細に検討すると、本鏡が同一の范型から製作されたとするのが妥当であると思われる点が多く見出された。

小論は鏡の製作に伴って、複数の鏡の鑄造に際し、范型がどのような扱いを受けてゆくのか、また、同じ范型でどこまで複数の鑄造が可能であったのか、等について考察を加えるものである。なお、中国製と考えられ、同図文としては比較的面数の多い、天・王・日・月・唐草文帯二神二獸鏡の一型式についても比較考察をおこない、いわゆる中国製と考えていた鏡と、仿製鏡との范型と鑄造技術の差についても若干考えてみたい。

なお、後述するように、小論に用いた鏡は同図文であることは言うまでもないが、その范型も同一のものを使用していると考えているので、ここでは同範鏡として扱っている。

二 同範鏡の鑄造と范型の様相

一、鏡の概要と古墳

考察の対称とした鏡は、三角縁獸文帯三神三獸鏡で、以下述べるごとく、現在九面存在し、我国でもっとも数の多いものである。次のような古墳から出土しているが、出土地が明確でないもの三面が含まれる。東側の地域から列記する。

一、野中古墳（岐阜県可児郡御嵩町大字上恵土字野中） 一面

二、伝伊勢出土 一面

三、龜塚古墳（滋賀県栗田郡栗東町出庭） 一面

四、紫金山古墳（大阪府茨木市宿久庄） 一面

五、奈良県出土 一面

六、長光寺山古墳（山口県厚狭郡山陽町大字郡字洞ヶ浴） 二面

七、免ヶ平古墳（大分県宇佐市川部） 一面

八、出土地不明（京都国立博物館蔵） 一面

以上、出土古墳が明らかかなもの五古墳計六面と、出土地域を伝えるもの二面、及び出土地不詳のもの一面である。

各鏡と出土古墳について簡単に概要を述べると次のようである。

一、野中古墳出土鏡（第一八四）は、鈕を含む約三分の一が欠失しており、遺存した部分も二つに折れている。鑄上りは一部に文様の不鮮明な部分もあるが、ほぼ良好な状態である。直径二一・五センチメートル。

古墳は美濃平野の北部、木曾川の東岸に位置する全長推定五八メートルの前方後円墳で、明治初年及び昭和十九年に土取等で発見された二基の並列して構築された竪穴式石室の一つから本鏡が発見された。別の石室からは刀剣八口が出土したという。本古墳の周辺には、国指定史跡である長塚古墳をはじめ、御嶽白山古墳、野中西古墳など、四世紀代後半頃の古墳が集中的に分布する。

二、伝伊勢出土鏡（第二三〇）は、個人の所蔵になるもので完形品である。文様の鑄上りは良好とはいえず、各文様の細部に不鮮明さ

が著しい。一部湯まわりの不良箇所もみられる。文様の不鮮明さは多分に范型のくずれによるものと考えられる。表面は平滑に仕上げられている。直径二一・六センチメートル。

三、亀塚古墳出土土鏡(第一七四)は、文様の検討から記述する一連の鏡と同范と確認したものである。獣文帯及に外区の文様帯約三分の一が欠失する。文様のうち獣文帯、外区文様帯部分に铸上りが悪く、文様の不鮮明な部分が存在するが、他はきわめて明瞭な線が铸出されている。鈕の頂部が地の鏡に比しておしつぶされたように平坦となっているが、後世この部分を削った徴候もなく、铸上りの当初よりの結果と考えている。文様面は全体にザラザラした感じである。直径二六・六二センチ。

本古墳は琵琶湖の南岸の平野内にあり、明治四十四年、墳丘の開墾中に刀斧とともに検出された。もともと円墳のようで、径約三〇メートルほどであったようである。

四、紫金山古墳出土土鏡(第一九四)は、本型式の鏡のうち、もっとも文様が鮮明に表出しているもので、范型の亀裂痕、剝離痕、補修痕などきわめて鮮明に認められる。亀塚古墳出土土鏡と同じく、文様面はザラザラした感じが強い。直径二六・六三センチメートル。

紫金山古墳は著名な古墳の一つであり、墳丘は丘陵の末端を利用して作られた全長一〇〇メートル、後円部径七六メートルの前方後円墳で、後円部にあった竪穴式石室から、鏡十二面、碧玉製石製品、玉類、短甲・刀剣などの武器類のほか多数の出土品が知られる。四世紀後半期を代表する古墳である。

五、奈良県出土土鏡(第二四四)は、現在保管場所が不明で、複写拡大して細部の検討を加えたものである。図版でも明らかのように、文様は一部に铸くずれが認められるが、内外区とも比較的良く描出されているが、神像・獣形とも鮮鋭さは失なわれ、范型の剝離によって文様帯が消失している部分が多い。直径など計測値は不明である。

六、長光寺山古墳出土土鏡A(第二〇四)

長光寺山古墳から二面の同范鏡が出土している。A(第二〇四)は獣文帯及び外区の三分の一ほどが欠失しており、遺存した部分も獣文帯部で二つに破れている。内区の文様は各細部にいたるまで鮮明に描出されているが、獣文帯は魚形など各部の表出が、文様は明確であるが肉のりが少ない点特徴的である。外区の櫛歯文や鋸歯文、波状文なども表現されていない部分もあり、全体に肉のりが少ない。直径二一・六三センチ。

七、長光寺山古墳出土土鏡B(第二〇五)はAと同様獣文帯と外区の一部が欠失する。Aと比較しても明らかなように、内区の神獸・獣文帯・外区の各文様とも表出された文様が肉厚であり、かつ鮮明である。後述するように、細部をこまかく比すと、文様に少しずつ差異が認められる点に注意される。铸上りが良好である。直径二一・六センチ。

本鏡を出土した古墳は、山陽町の盆地内を見おろす丘陵端部に造営された前方後円墳で、全長約六二メートルを測る。墳頂部に二基の竪穴式石室があり、明治十四年各種の副葬品が検出されている。

昭和四十六年學術調査が行なわれた。鏡は当初九面出土したようであるが、三角縁獸文帯三神三獸鏡三面、内行花文鏡一面のほか、碧玉製腕飾類、紡垂車、鉄器類などが知られており、四世紀後半代の時期が想定されている⁽⁹⁾。

八、免ヶ平古墳出土鏡(第二五圖)

全面の文様とも文様細部の表出がきわめて不良である。内区の神獸の顔の表情はほとんど表現されていない。内区の乳の一ヶ所に表現される松毬形も形状を失している。獸文帯及に外区とも文様の表出が不良で、剝離した部分が著しい。多分に範型のくずれによる結果を反映しているものである。直径二一・六八センチ。

免ヶ平古墳は宇佐市川部にある高森古墳群中にあり、著名な赤塚古墳とともに代表的な古墳である。全長約五〇メートルの前方後円墳で、内部主体は竪穴式石室である。副葬品には本鏡を始め、舶載の二神二獸鏡、碧玉製腕飾、玉類、鉄製の武器・農工具類が多数検出されている。昭和四十七年調査された。宇佐地域の四世紀代後葉を代表する古墳である⁽¹⁰⁾。

九、出土地不明鏡(第二六圖)

出土地が明らかでないが、保存状況はきわめて良好な鏡である。内区から外区にかけての一部に湯まわりの不良の所がみられる。湯口の部分であろう。この部分の逆の部分には、ととに外区に文様の不鮮明さが目立つが、範型の不良とともに、湯まわりの結果が反映していると考えられる。これは他の鏡についても指摘できる点でもある。内区の神獸の各細部の表現とも良好であるが、獸文帯に形が充

分明らかでないものも認められる。外区の文様帯では文様が失なわれている部分もあり、範型にくずれを生じさせている状況を見ることができる。直径二一・六二センチ。

二、範型のくずれと補修

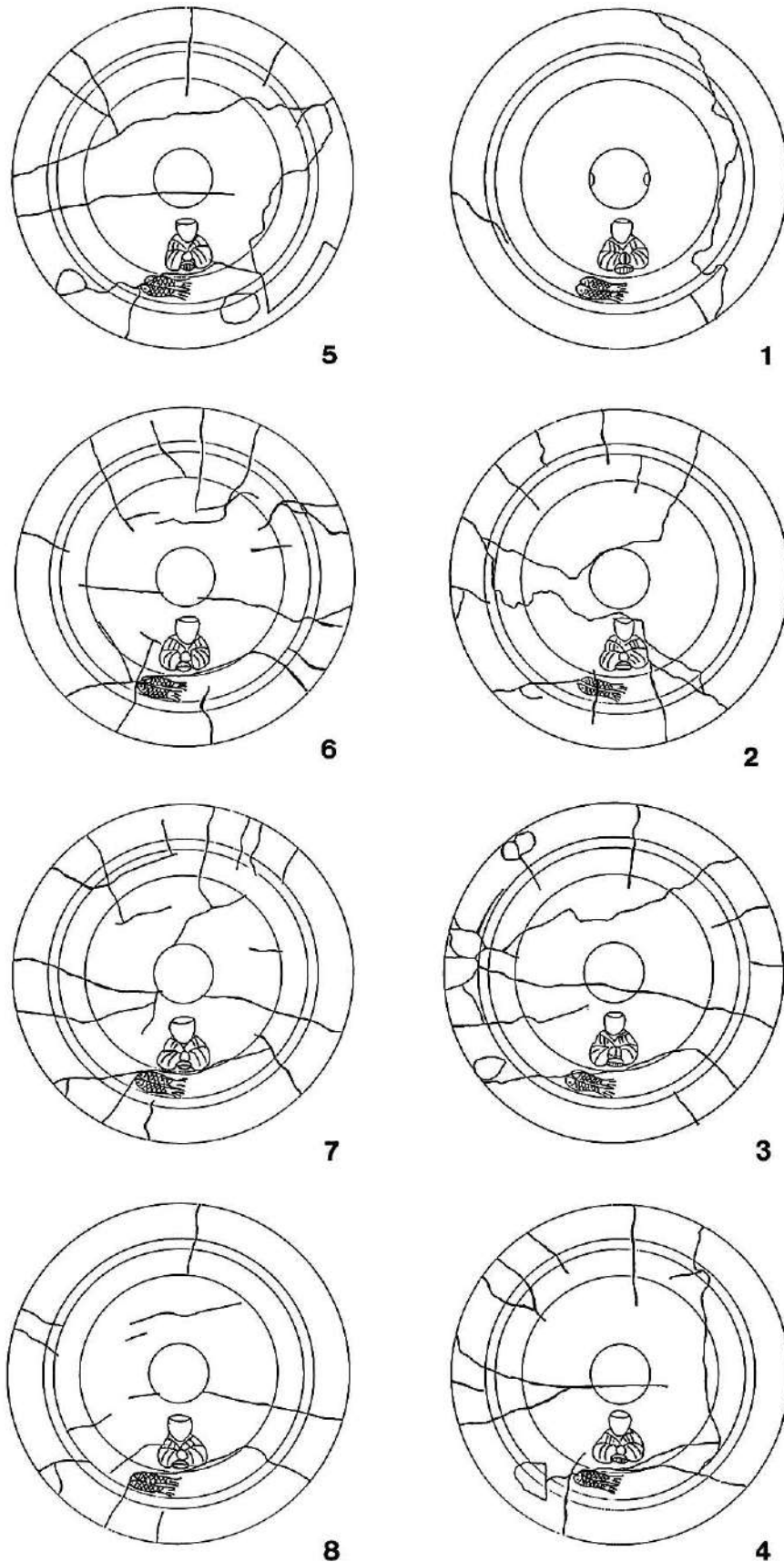
九面の鏡が一つの範型からつくられた同範鏡であると考える手ばかりを若干説明する必要がある。

三角縁獸文帯三神三獸鏡の各像は次のように個有の番号を付した。図版の写真は内区の神像のうち、左下に双魚形が位置するものを正面とし、右廻りに番号を付した。内区は鈕を中心に下に神像〔1〕、獸形〔2〕、神像〔3〕、獸形〔4〕、神像〔5〕、獸形〔6〕と配し、各像間に大きな乳を配する。神像〔5〕と獸形〔6〕の間の乳の内方に松毬形一個を置く。内区外方に鋸齒文帯と獸文帯をめぐらす。獸文帯の各像は、正面神獸〔1〕の左下の双魚形を〔1〕とし、右廻りに龍〔2〕、獸〔3〕、龍〔4〕、蛙〔5〕、双魚〔6〕、龍〔7〕、次の像は欠損する例が多いが獸〔8〕、龍〔9〕、蛙〔10〕と配され、各像間に乳10個を置いている。獸文帯の外側に櫛齒文、さらに外区は鋸齒文〔1〕、波文〔2〕、鋸齒文〔3〕の各帯をめぐらし、外縁の三角縁に通じている。

先述したように、九面の鏡は各像の細部を比較すると、いくつかの共通点と差異が認められる。こうした鏡背文様内にみえる共通の特徴および各鏡間の同じ像の表現の差異について説明を加える。

(イ) 共通してみられる範型の特徴

範型の亀裂によるものと考えられる痕跡が存在する。紫金山古墳に典型的にみられるように、内区獸形〔2〕の口から頭部さらに鈕の上



第1図 範型亀裂模式図

(1)亀塚 (2)野中 (3)紫金山 (4)長光寺山A

(5)長光寺山B (6)出土地不明 (7)伝伊勢 (8)免ヶ平

部をへ、鈕の右側獸形〔6〕頭部を貫き獸文帶獸形〔9〕をへて外区に達する横方向の亀裂線が存在する。この亀裂線の痕跡は、各鏡すべてに明瞭に識別できるとは限らないが、内区獸形〔2〕の口内の線及び獸形〔6〕の頭部にはその痕が良く遺存する。この亀裂は亀塚鏡では全くその痕跡がなく、伝奈良県出土・破損している野中鏡では不明瞭であるが、この二例を除いて他のすべての鏡に残っている。亀塚鏡は範型の亀裂以前の鑄造によるものと想定される。亀裂は各鏡で差があり、次第に範型の亀裂が進行してゆく反面、その補修もあつたことも想定させる（第一・二・三図）。

次に範型の文様面が剝離した状況が共通して存在する。鈕右側の獸文帯中の獸形〔8〕の箇所にもみられる異常な盛り上がりである（第四図）。獸形の形がまったく存在していない。この部分は野中古墳鏡と長光寺山古墳鏡Aについては、鏡の欠損部にあつており、旧状が不明である。ただ、亀塚古墳鏡では、その部分の獸形が旧状のまま残っていると考えられる。したがつてこの部分の形状が共通しているのは、紫金山、長光寺山B、亀ヶ平・伝奈良、出土地不明、伝伊勢の各鏡のものである。さらに、紫金山鏡、長光寺山B鏡の例では、凸部に櫛歯文が存在しており、他の例とは差をみせている。共通した範型の特徴は細部にも通じるので次に各区の細部についての共通点及び差異を指摘してみたい。

(ロ) 内区（第五・六・七・八図）

鈕 鈕は直径三センチほどであるが、鈕孔の方向は遺存する各鏡ではすべて同方向である。すなわち、獸形〔2〕と神像〔3〕との間の乳と対方の乳に向けあけられている。円頂部は研磨調整されているが、

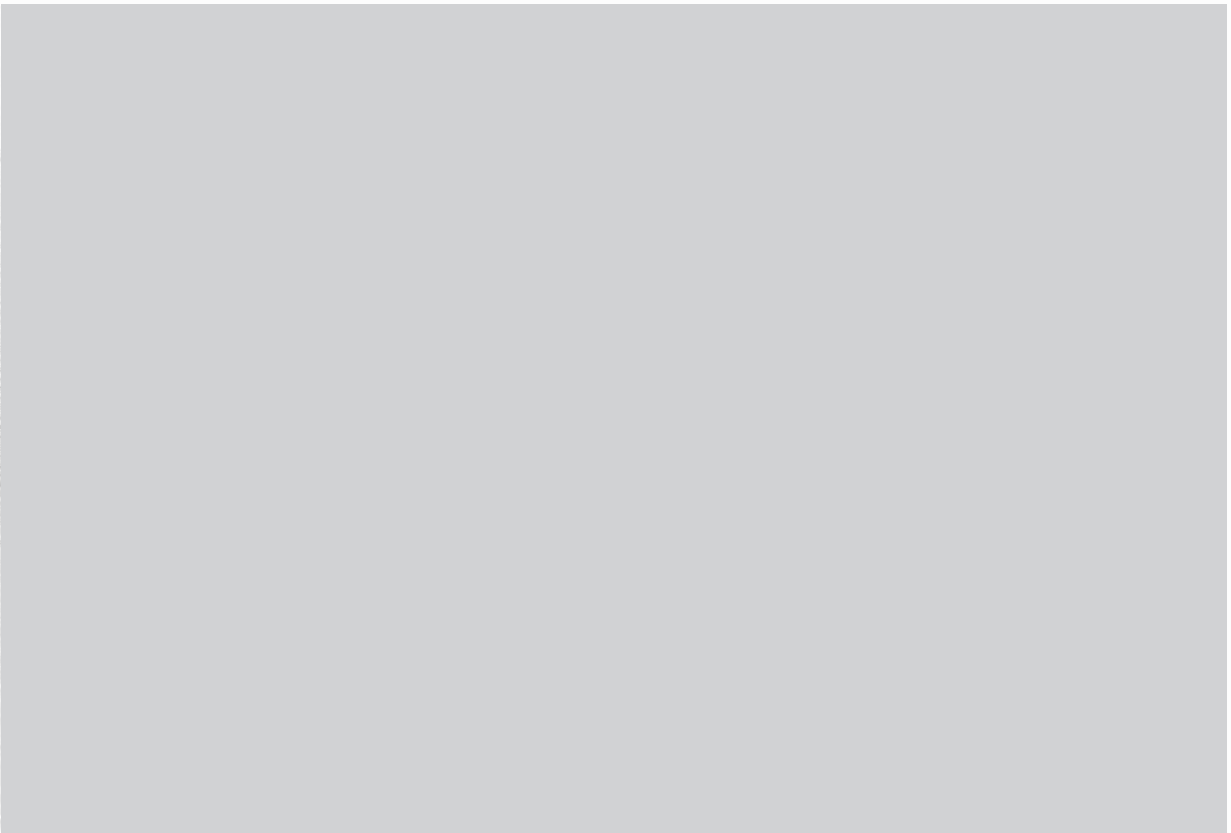
孔の内側は溶材のバリがそのまま残っている。鏡の上を横ぎる亀裂痕は紫金山、長光寺山A・Bの各鏡に明瞭である。

神像 三つの神像は細部においてそれぞれ若干の表現の差が存在するが、基本的には同じ形で表わされる⁽¹⁾。しかし、各鏡の神像〔1〕、〔3〕、〔5〕には異なつた二種の表現でまゝとまっていることが知れる。神像〔1〕の場合、亀塚古墳鏡と長光寺山古墳B鏡の例で明らかのように、顔のうち頭部、目や眉毛・口に表現の差が明らかである。さらに衣服についてみても、肩から胸にかけてみられる衣の襞の間隔と形状、膝部の衣の襞の形状の場合もその差が明瞭である（第五・六図）。神像の顔の右側にみえる縦の線二本についても形状や表現が異なつているし、左側の渦状文も形態を異にする。この表現の異なりは、神像〔1〕のみを単独で比較すると全く別の像形であると考えの方がごく普通であろう。神像〔3〕・〔5〕の場合でも、神像〔1〕と同様なことが云える。亀塚古墳の神像の形をI類と、長光寺山古墳の場合をII類とすることができ。

獸形 三つの獸形についても、神像の場合と同様、二つの形の差が認められる。例えば獸形〔4〕をみた場合、左向きの顔面にみえる目の形、その内側から延びる髭の形状。さらに胸から脚にかけての表現にはその差が明瞭である。とくに後脚の曲線による表現は、亀塚古墳鏡の場合、曲線による表現が七本であるのに対し、長光寺山古墳A鏡・B鏡の場合では五本に簡単に表現されており、後脚から後方へのびる一本のゆるいS状の尾も、先端の尾先の形も大きく異なっている（第七・八図）。また、獸形〔6〕の場合でも、顔の表現とともに



(1) 紫金山古墳

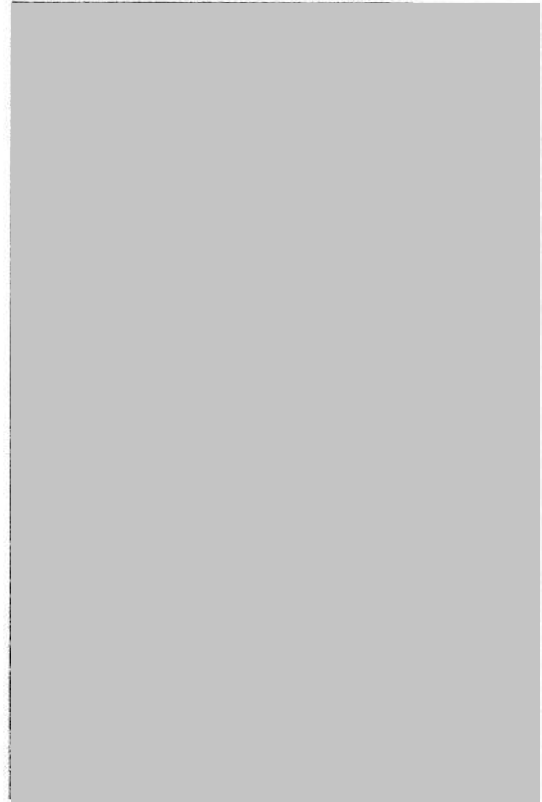


(2) 長光寺山古墳B鏡

第2図 笠型亀裂痕



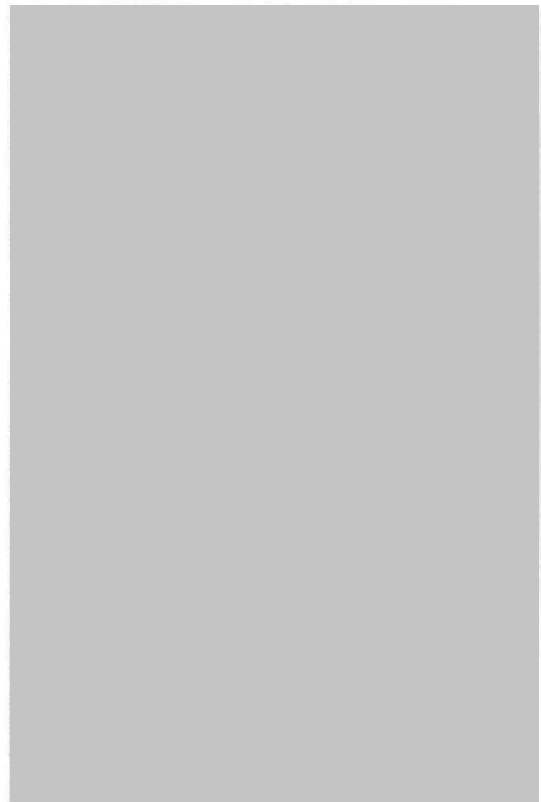
(3) 出土地不明



(1) 亀塚



(4) 伝伊勢

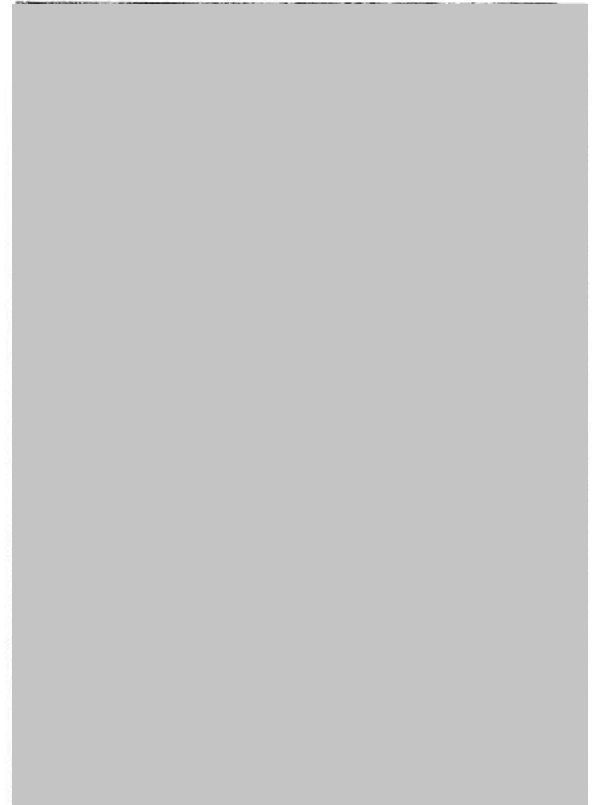


(2) 紫金山

第3図 範型の亀裂痕



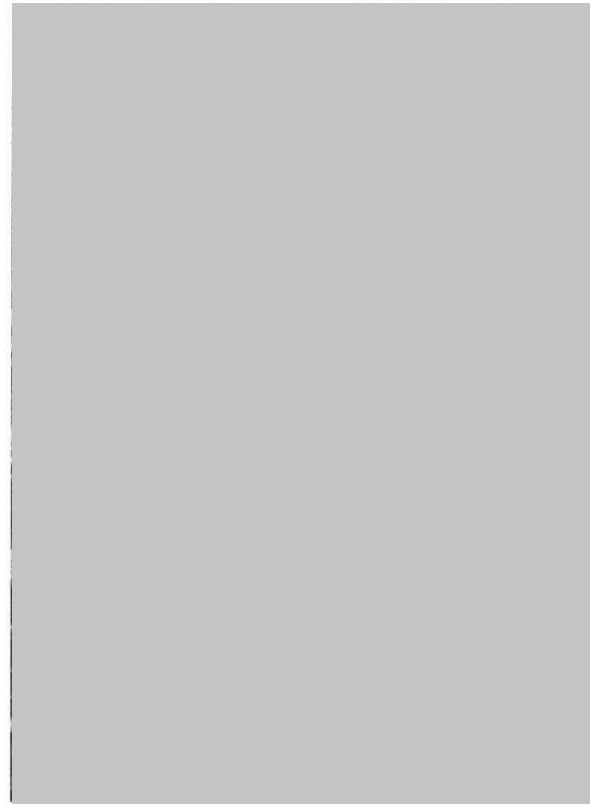
(3) 出土地不明



(1) 紫金山

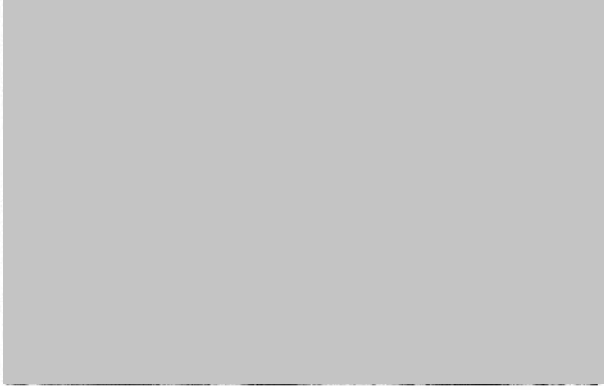


(4) 伝伊勢



(2) 長光寺山B

第4図 範型剝離痕



(5) 長光寺山B



(1) 亀塚



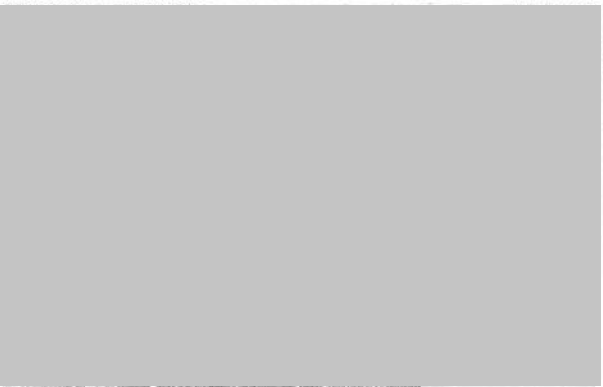
(6) 山土地不明



(2) 紫金山



(7) 伝伊勢



(3) 野中



(8) 免ヶ平



(4) 長光寺山A

第5図 内区神像(5)比較図

II類



(4) 長光寺山A



(5) 出土地不明



(6) 長光寺山B

I類



(1) 亀塚



(2) 紫金山



(3) 野中

第6図 内区神像(1)比較図



(5) 長光寺山B



(1) 亀塚



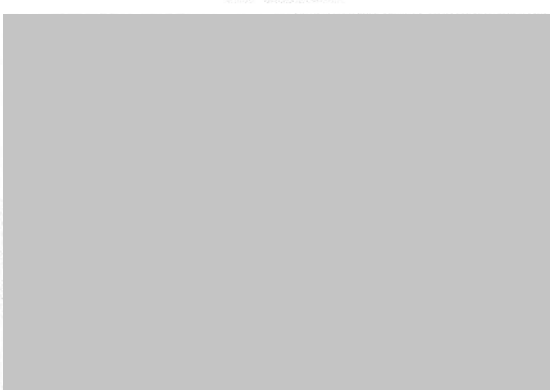
(6) 出土地不明



(2) 紫金山



(7) 伝伊勢



(3) 野中



(8) 免ヶ平



(4) 長光寺山A

第7図 内区獣像(4)比較図

II類

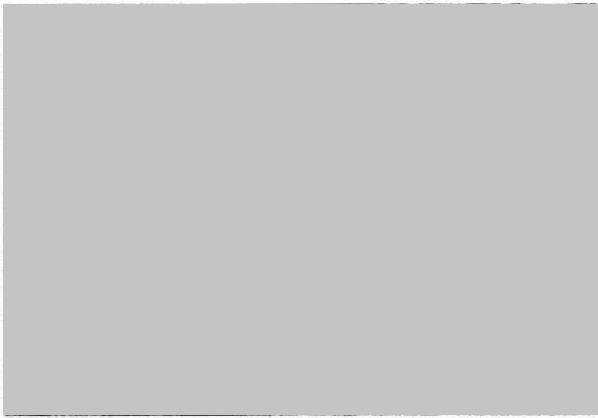


(4) 長光寺山A

I類



(1) 亀塚



(5) 長光寺山B



(2) 紫金山



(6) 出土地不明



(3) 野中

第8図 内区獸形(2)比較図

顔面の両側にのびる複数の髭の形状にも明らかな差が認められる。細部の表現は三つの獣形ごとにそれぞれ異なった表現でまとまった二類の獣形を指摘できる。神像と同様、単独で各獣形を比較すると、全く別の形ととらえることができる。神像の場合と同様、亀塚古墳の形状のものをI類とすれば、長光寺山古墳の場合はII類としてまとめることができる。

内区の神像および獣形の表現の差は、各鏡を分けると、それぞれI類とII類にほぼまとまってしまうことが明確である。各鏡を分けてみると、次のようである。

I類 亀塚古墳鏡、野中古墳鏡、紫金山古墳鏡

II類 長光寺山古墳鏡A・B、伝伊勢出土鏡、奈良県出土鏡、免

ヶ平古墳鏡、出土地不明鏡

この表現の差は、範型に加えられた補刻ないし修整刻の結果と考えられる。なお、内区外縁の鋸歯文帯の各鋸歯文についても、同一個所での形状の異なりを指摘することができる。

い 獣文帯(第一〇・一一・一二図)

獣文帯は、各像一〇と獣文帯を限る圏線にそれぞれ特徴的な差がみえる。まず、先述指摘したように、獣形〔8〕の部分の凸形に表現される範型に在る凹みである。この部分の表現は象とも考えられる獣形であるが、凸部は各鏡によっても拡がりの差があり、上方の乳や獣形の頭部を包み込む形でその範囲が拡大している。この凸部をもつ鏡は、この部分の欠損している野中古墳鏡と長光寺山A鏡では明らかでないが、亀塚古墳鏡の場合のように、まだ凸部が発生していないと考えられる一面を除き、他のすべての鏡に共通してみられる

範型のいたみの痕跡である。さらに、凸部は獣文帯の外側の櫛歯文帯にも及んでいるが、このうち、紫金山鏡と長光寺山鏡B(四図1・2図)には、もり上がった凸部に櫛歯文がやや荒い間隔で補刻されているのが知れるし、両鏡のなかでも、長光寺山鏡の方がその刻線が次第に不明瞭になってきていることがわかる。本来の櫛歯文の位置と凸部の櫛歯文の高さも異なっており、凸部の櫛歯文は、範型に出来た凹部に、櫛歯文を周辺と合せて補刻した結果である。

獣文帯の外側で、櫛歯文帯を限る圏線についてみると、次に指摘する共通の事実が明らかである。

獣文帯の蛙〔5〕と右側の乳にかけてみられる二重の圏線である。二重の線は蛙の頭部から始まり、右側の乳に接しさらに若干進んで止まっている。各鏡にはこの二重の圏線を有するものと、無い鏡がある(第九図)。

二重の圏線を有する鏡は、長光寺山B鏡、免ヶ平古墳鏡、伝伊勢鏡、奈良県出土鏡、出土地不明鏡の五面である。また、圏線に重なりがない鏡には、亀塚古墳鏡、野中古墳鏡、紫金山古墳鏡、長光寺山A鏡の四面である。二重線は補刻の結果である。

次に各獣形、双魚などについてその差を簡単に記しておく。

双魚形〔1・6〕 二ヶ所に配される左向きの双魚形である。良く似た形状であるが、口髭、頭部、鱗、尾の表現など細部では大きく異なっているのが明らかで、その形状は二つの類にまとまる。魚形〔1〕の場合(紫金山古墳鏡をみると、鱗ではI類の内側の魚で、右上から左下への線の数で一三本を数えるが、II類(長光寺山B鏡では九本となる。同様、交差する線もI類で九本、II類で七本である。外側の

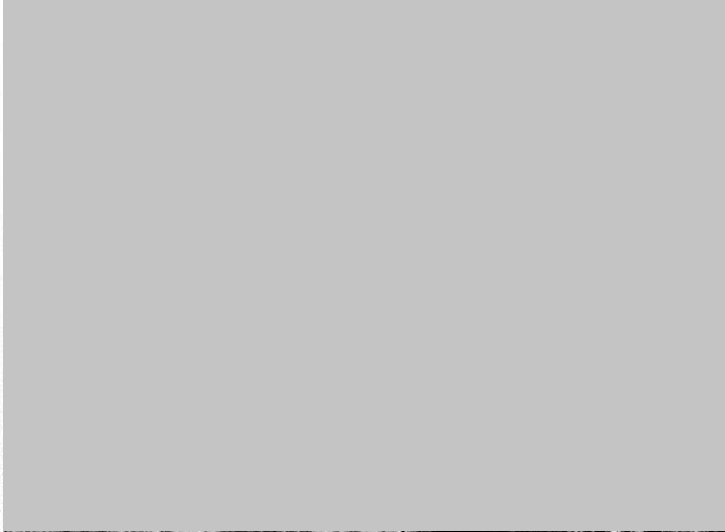
魚形の尾に近い部分の鱗線も、I類では魚形の外形にはみ出して延びて表現されるのに対し、II類では、全体に魚形も太く、鱗線のはみ出しもない。全体にI類の方が鱗の表現は細かくなっている(第一三図1・2)。また、線で表わされた尾の数も、I類では内側の魚で六本、外側の魚で四本、II類では内側の魚で四本、外形の魚で四本となり、それぞれ形状も異なっている。口髭についてもI・II類ではその形状が異なる。

魚形〔6〕では、鱗の線数が内側の魚でI類九本と八本、II類の場合で八本と六本、外側の魚ではI類が九本と九本、II類では九本と八本で表現される。尾の形状は大きく異なりI類では外側の魚で三本、

内側の魚では五本で表現されるのに対し、II類では外側で二本、内側で三本となる。魚形も全体にII類が小さいし、口髭も欠失している。(第一三図6)

I類に属する鏡は、亀塚古墳、野中古墳、紫金山古墳、長光寺山古墳Aの各鏡が含まれるし、II類に属するものは、長光寺山古墳B、伝伊勢出土、奈良県出土、出土地不明の各鏡があげられる。

龍〔2〕・〔4〕・〔7〕・〔9〕 仿製の獸文帯中の龍形の表現にしばしば見られる変形された龍である。三つの龍形はそれぞれ形状が異なるが、後方に顔を向け疾走する左向きの龍である。九面の各像を比較する



(1) 紫金山古墳鏡



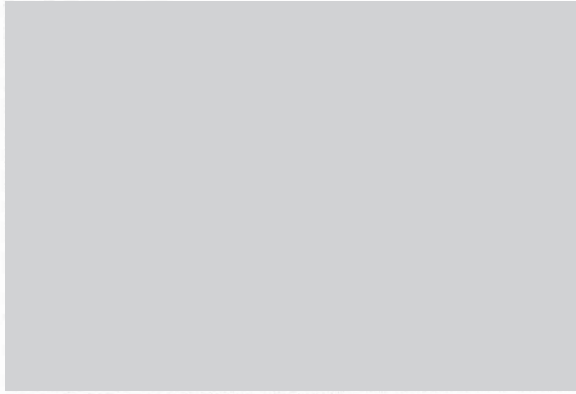
(2) 出土地不明鏡



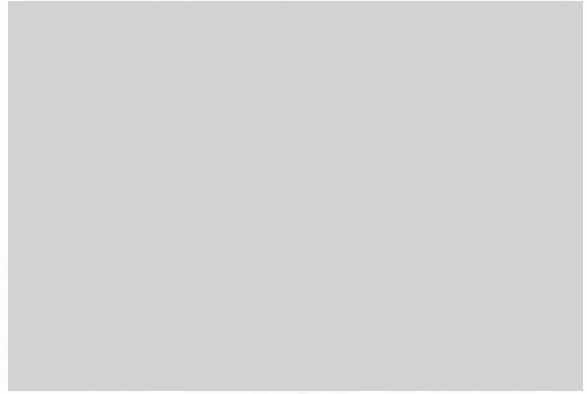
(3) 免ヶ平古墳鏡

II類

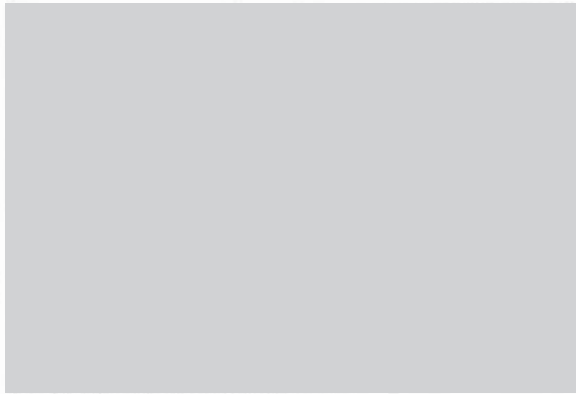
I類



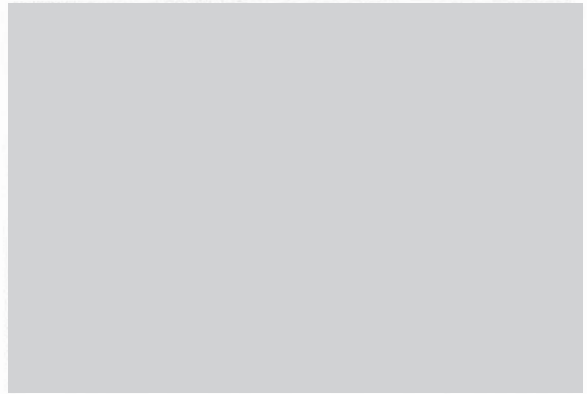
(1) 双魚形



(1) 双魚形



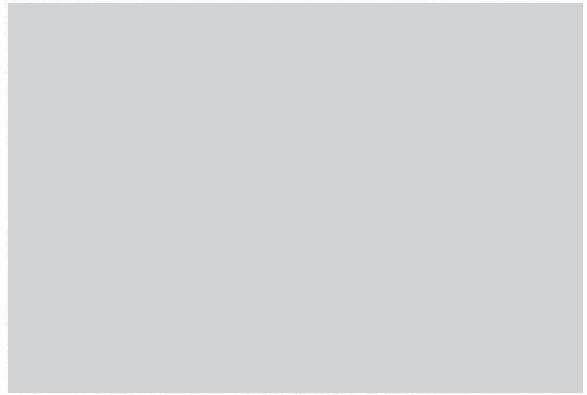
(2) 龍形



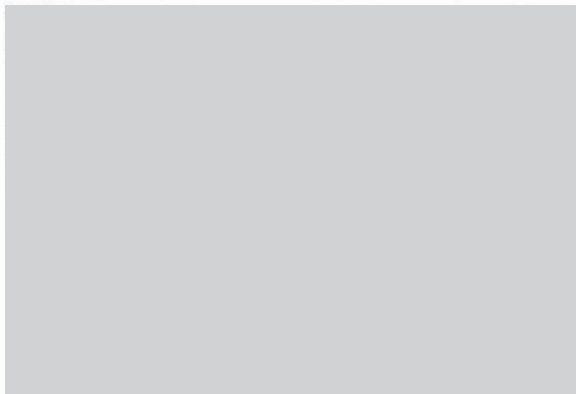
(2) 龍形



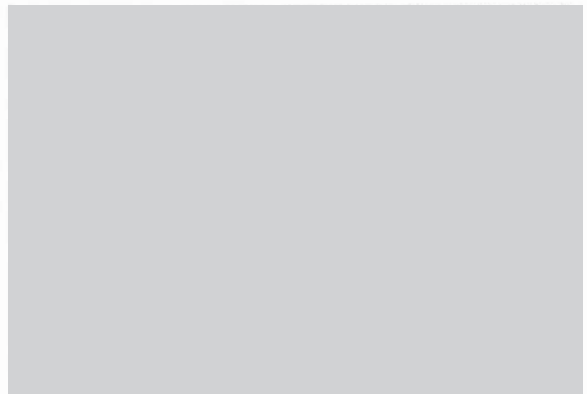
(3) 獸形



(3) 獸形



(4) 龍形

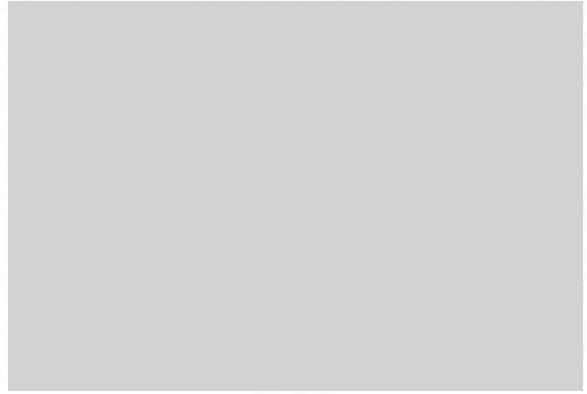
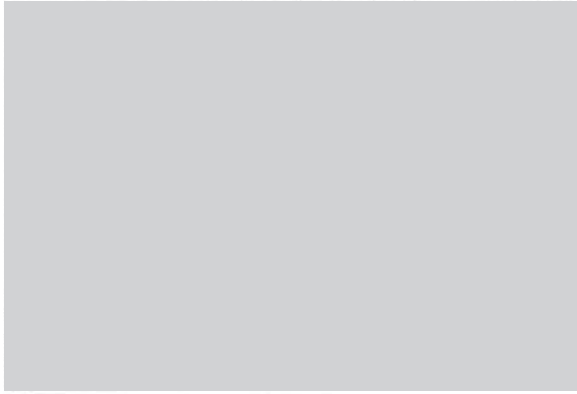


(4) 龍形

第10図 獸文帯各像比較図

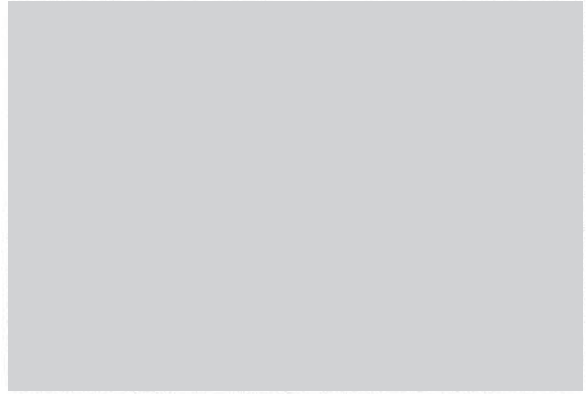
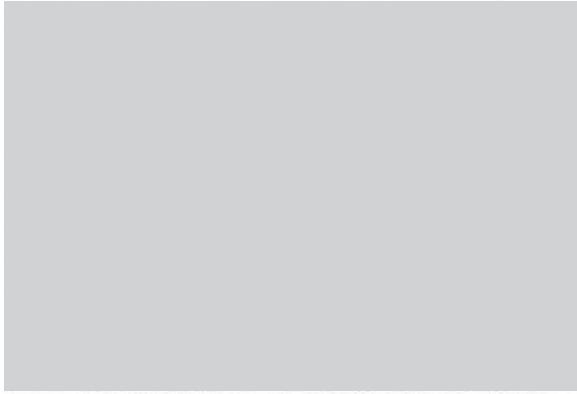
II類

I類



(5) 蛙形

(5) 蛙形



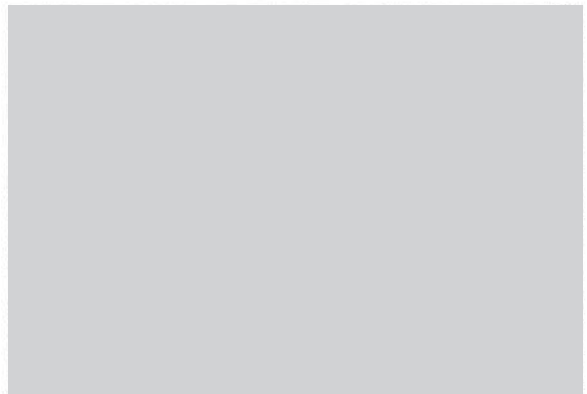
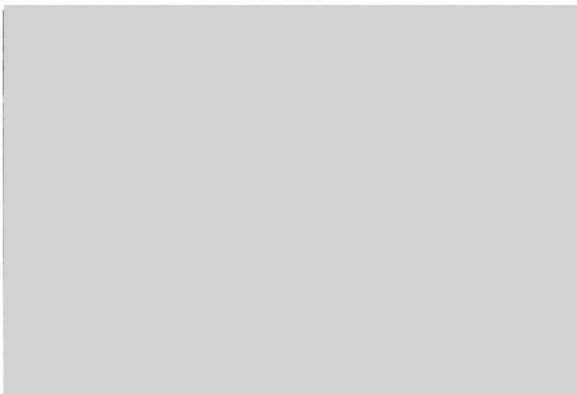
(6) 双魚形

(6) 双魚形



(7) 龍形

(7) 龍形

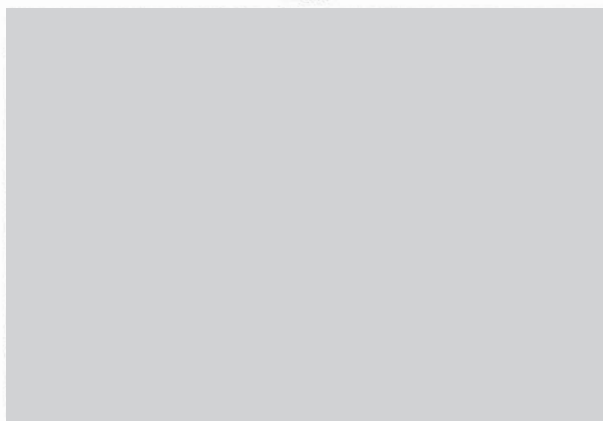


(8) 獸形

(8) 獸形

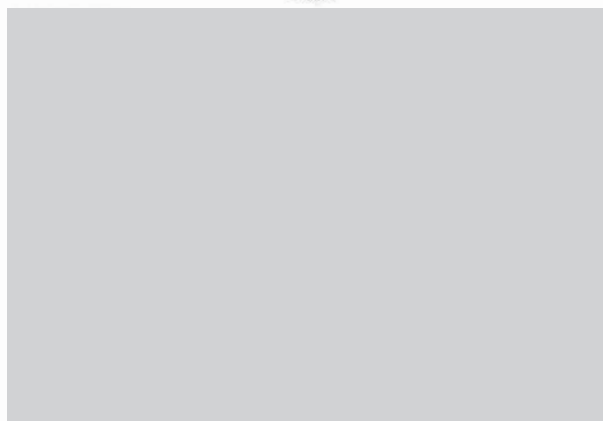
第11図 獸文帶各像比較図

Ⅱ類

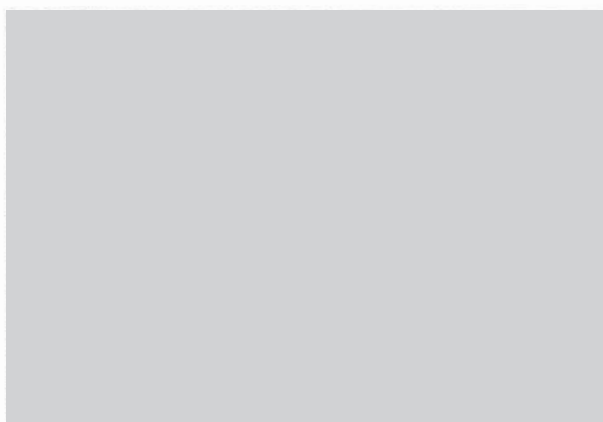


(9) 龍形

Ⅰ類



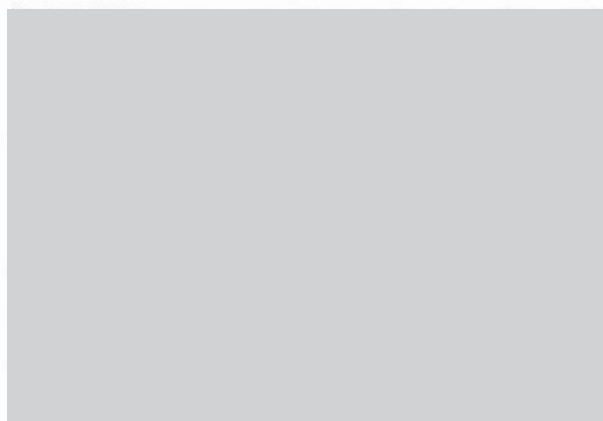
(9) 龍形



(10) 蛙形

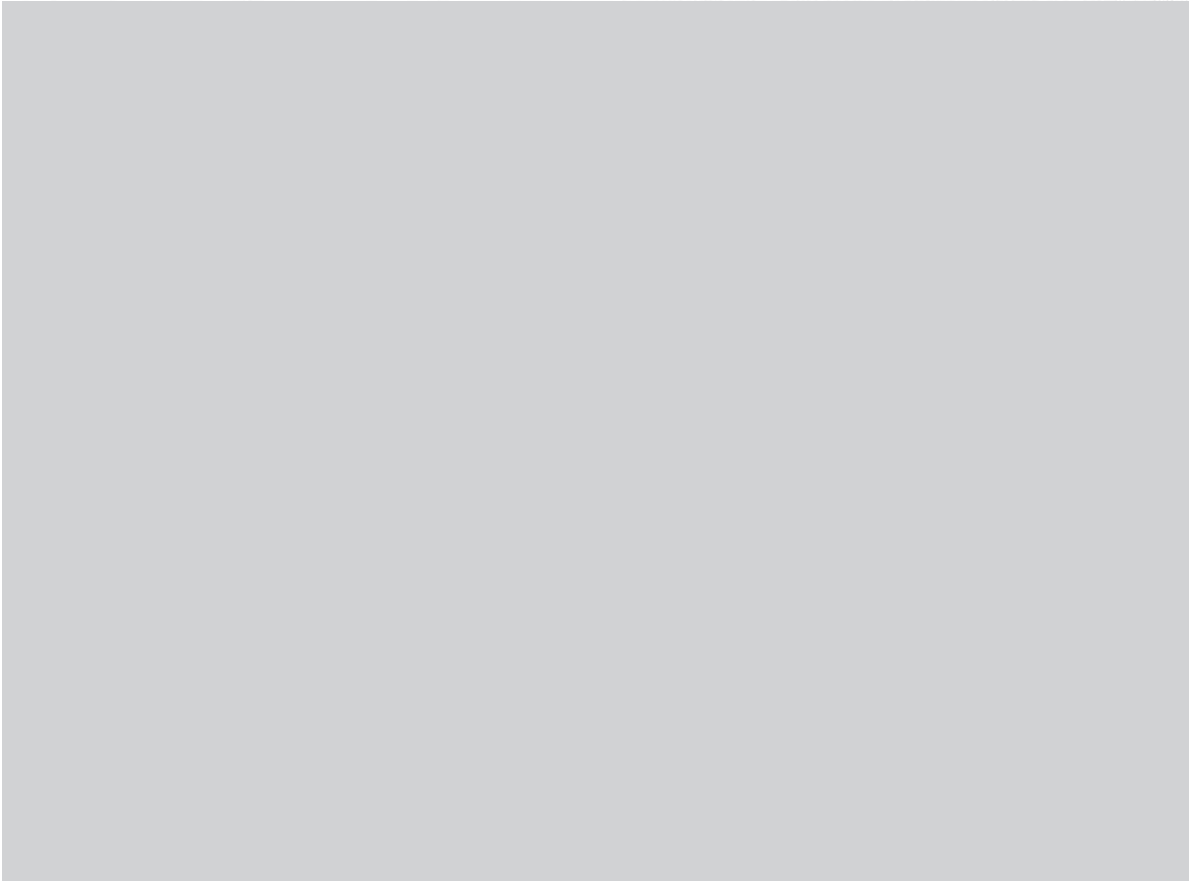


(10) 蛙形

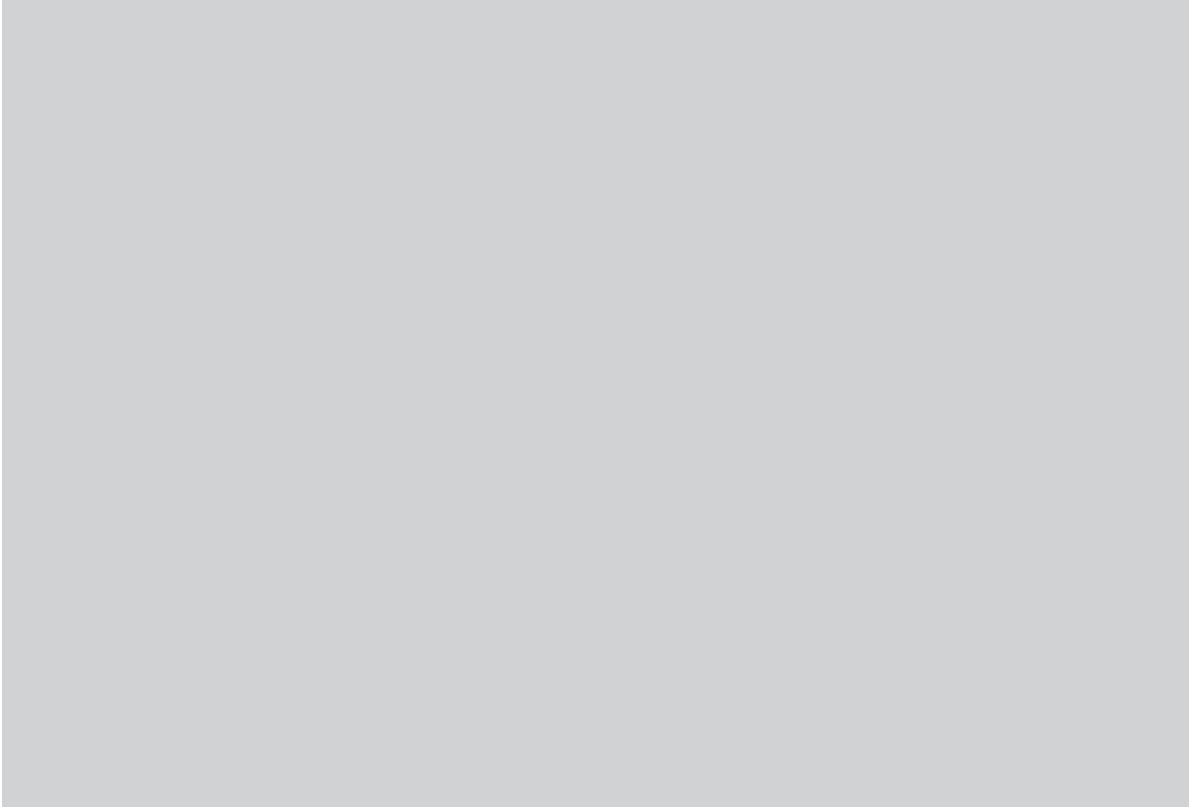


(8) 獸形の原形

第12図 獸文帯各像比較図



(1) I類

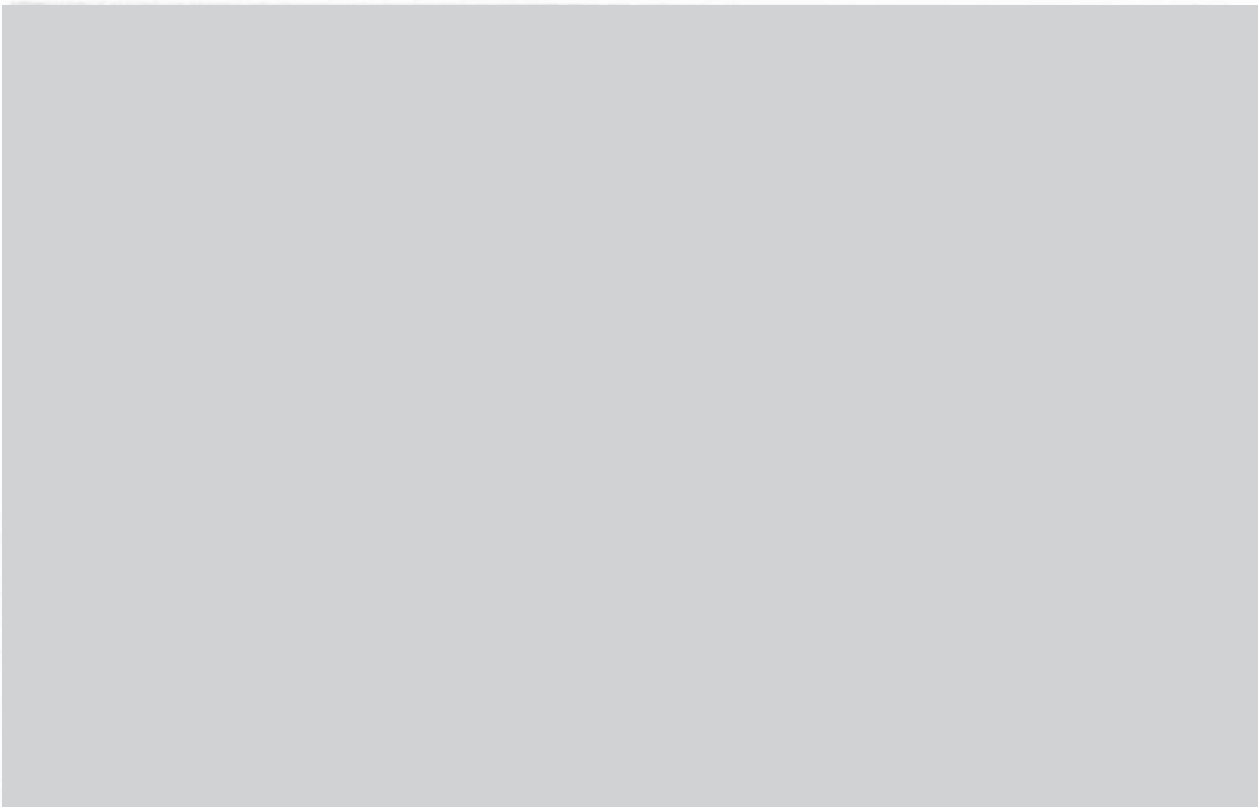


(2) II類

第13図 双魚形比較図



(1) 亀塚古墳



(2) 長光寺山B鏡

第14図 櫛齒文の再刻

と、その形は魚と同様二つの類に分けよう。龍形〔2〕の場合〔第一〇図2〕、頭部、胴前半部、胴後半部、各乳の付近まで延びた前後の脚、尾部など、各構成要素の基本的な描写技法は同様であり、前後の乳間に同様の形でおさめられている。I類（紫金山古墳鏡）とII類（長光寺山B鏡）では胴部の曲線の表現と形、尾部、頭部と周辺の造形の表現など一見して差が明瞭である。龍〔4〕の場合もほぼ同様なことが指摘できるが、〔4〕と右側の獸形〔3〕の部分が湯口にあたっており、文様面の鑄上りが著しく荒れている鏡も見受けられる。

龍〔7〕の場合、原形を良く残す亀塚古墳鏡や紫金山古墳鏡の龍形と、他の同像とに同一箇所若若干異なる部分がある。全鏡を通じて、後胴から延びる後脚が、外側の圈線に重なり合うことが共通の特徴として存在するが、胴後部の曲線の表現は亀塚古墳鏡などのI類とII類の長光寺山古墳B鏡とでは若干の差をみせる。II類は全体に線のもりあがり少なく、尾部については鮮明さに欠ける。ただ尾部はI類・II類とも同形の要素が大きく、龍〔7〕は部分的な彫り直しが範に加えられた可能性が高い（第二図7）。

龍〔9〕は鏡自体が破損し文様の全部または一部が欠落しているもの四面（亀塚・野中・長光寺山A・B鏡）を数える。文様が残る各鏡をみても、紫金山古墳鏡と長光寺山A鏡が、文様の構成がやや明瞭であるのに対し、他の四面は範型の不良ないし、湯まわりの不良が著しい。龍形は他の箇所の龍と同様の表現である。紫金山古墳鏡の龍形像と比較して他の同像が不明瞭のため、細部での検討は十分でないが、後脚の表現では紫金山鏡と出土地不明鏡の場合とはその形態が明らかに異なっている。前者をI類とすれば、後者はII類にすることができる。この龍形では遺存する全鏡の像に共通した範型の傷が認め

られる。すなわち、胴部前端と乳の間にみられる範型の凹みである。盛りあがった傷は、内区外縁の鋸歯文帯に一部接しており、その傷痕は各鏡によりその範囲に差がある点である。本龍は原型から一度修整され彫り直しを一部受けているが、範型の傷はそのままにされていた可能性を示す。さらに胴後端部で外区にかけてみられる縦方向の範破れの傷痕がある。この痕跡は全鏡を通じて観察されるもので、その傷痕も次第に太さを増大させ、さらにその前後の周辺にも傷痕が増していることも識別できる（第二図9）。

獸形〔3・8〕 獸形は2箇所存在する。うち獸形〔8〕は、先述の如く範型の剝離痕とそれに若干修整を加えた線が鑄出されており、獸型の全容は不明である。ただ、亀塚古墳鏡では、鏡自体が破損しているが、獸形の胴後半がわずかに遺存し、その形にまだ範型の剝離痕が認められないので、他の鏡より鑄造が先んじていたことを推測させる（第二図8）。獸形〔3〕は、この部分が湯口にあたっており、全鏡とも何らかの形でその影響を受け、文様に鮮明さを欠く。九面のうち、野中古墳鏡はこの部分が欠除しているが、他の鏡でも、わずかに紫金山鏡と長光寺山B鏡が獸形の鮮明さを保つにすぎない。両者の獸形を比較しても明らかのように、各部分で形に差をもっている。I類（紫金山古墳）では、左向きの象に似た長い鼻をもつ四足の獸で、長い尾を下方に下げている。頭部の斜上方に小さな円点をもつ。この形態に対し、II類（長光寺山B鏡）は頭部の鼻状の表現、胴部の曲線の表現、脚の描写の方法など、全く別の獸形としてとらえることができる。とくに胴の後半部の描き方が、I類では前方に張り出す弧状となるが、II類では中央部の弧状が後方に張り出す形状となる点

が特徴である。各鏡でI類およびII類に属する鏡を区分すると、文様が明らかかなもので、I類では紫金山古墳鏡、長光寺山古墳A鏡、II類では長光寺山古墳B鏡、出土地不明鏡、伝伊勢鏡、奈良県出土鏡をあげることができる。免ヶ平古墳鏡はII類に属する形状を示すが、脚部の範型のくずれが、外方の櫛歯文帯にも及んでいる例である(第一〇図3、第一一図8)。

蛙〔5〕・〔10〕 二箇所に配される。左向きの姿であるが、〔5〕と〔10〕では若干の形の差をもつ。蛙というより海老といった方がふさらしい形でもある。胴の前半部に小円点が表出されている。頭部先端より長い二本の髭状のものが左右に出ており、先端は龍形と同様、数本にわかれた枝状の足(髭)先をもつ。胴後部には左右に脚が張り出し先端に前胴と同じく枝状の足端となる。頭部と乳の間には一線を置き櫛歯文五個を配する。ただ、蛙〔10〕の櫛歯文は四個である。胴の後端には円点一個がありその左右から曲線が張り出している。この蛙形にも二つの類がある。I類(亀塚古墳鏡)とII類(長光寺山B鏡)の間には、細部で多くの差がある。髭の形、胴上部の円点の配列状況と数、先端の櫛歯文の数と形などを指摘できる(第一一図5)。全体の形もI類よりII類の方がやや細くなっている。後胴右脚は、先述した圏線の二重線の引き直しによって脚端が消えている。

蛙〔10〕についても同様若干の差があるが、II類のものが像自身に不鮮明なものが多いが、脚などにその差を指摘することができる。I類に属する鏡は、亀塚古墳鏡、野中古墳鏡、紫金山古墳鏡、長光寺山古墳A鏡の四面、II類は伝伊勢鏡、奈良県出土鏡、免ヶ平古墳鏡、長光寺山古墳B鏡の五面をあげ得る(第一二図10)。

櫛歯文帯 獸文帯の外側をめぐる櫛歯文帯にもその表現内容に差をもっている。この櫛歯文帯は線も細く、かつその間隔が緻密であるため、鑄造時に十分鑄出されない場合もあったと考えられる。櫛歯文がほぼ全域にわたって表出しているのは紫金山古墳鏡の場合(第一九図)のみで、他の鏡の場合は、湯口の部分はもちろん随所に文様が不明瞭なところが多い。とくに、長光寺山古墳A鏡の場合(第二〇図)はほとんど欠失しているといつて良い。この櫛歯文帯にも、九面の鏡を通じて二つの類があることが明らかである。例えば、獸文帯の蛙形〔5〕から双魚形〔6〕にかけての櫛歯文をみると、I類(亀塚古墳鏡)では線の間隔も狭くその本数も多いのに対し(第一四図1)、II類(長光寺山古墳B鏡)ではその逆である(第一四図2)。ちなみに、蛙形〔5〕の前端の櫛歯文様の横線から蛙の後方の乳の中心までの間の櫛歯文の数をみると、I類で二四本、II類で二〇本となる。この櫛歯文の表現の差はどの部分でもほぼ同様で、II類は全体に荒く施されていることが明らかである。さらに、I類では櫛歯文帯の内方に、わずかであるが圏線にそって細い一線が表出している。これに対し、II類では、双魚形〔6〕の右半から櫛歯文がほとんど消失しかけており、その部分に、I類の細線と共通する圏線が認められ、さらにその線は、蛙〔5〕の部分まで及んでいないことが知れる。

このことは、櫛歯文帯にほとんど文様が表わされていない長光寺山古墳A鏡の例や、II類の櫛歯文帯のなかでも、各鏡間に文様の消失度に差があることなどの事実により、I類からII類への段階で櫛歯文が再刻されていることを示すものであるし、さらにそれが再度範型の剝離などによって消失してゆく過程を示しているものである。

I類に属する鏡は、亀塚古墳鏡、野中古墳鏡、紫金山古墳鏡を上げ得るし、II類の鏡は長光寺山古墳B鏡、伝伊勢鏡、出土地不明鏡、奈良県出土鏡をあげ得る。また免ヶ平古墳鏡もII類に属するものである。長光寺山古墳A鏡は不明な所が多いが、I類の特徴をいくぶん残していると考えている。

やや結論ざみであるが、櫛歯文様の消失の度合を各鏡にあてはめれば、II類では長光寺山古墳B鏡、出土地不明鏡、伝伊勢鏡、奈良県出土鏡、免ヶ平古墳鏡が順序となる。長光寺山A鏡はB鏡に先行するものであるし、I類はさらに先行した原型を示すものである。

(二) 外区

外区は獣文帯との界圏をへて鋸歯文帯、波文帯、さらに櫛歯文帯へと圏線をはさんで続き、外縁の三角縁に致る。三つの文様帯の文様とも范型の剝離などにより、所々不鮮明なところが存在する。とくに湯口の部とその対方の部分に著しい。文様帯の各細部がほとんど傷むことなくほゞ原型の形態を示しているのは紫金山古墳鏡が唯一である。

各文様帯の文様の形状を鏡間で比較してみると、これまで述べてきた内区・獣文帯の像形の類型の差と同様、大きく二つの類に区分されることは明らかである。I類（紫金山古墳鏡）とII類（長光寺山古墳B鏡）である。（第一五図2・5）。I類とII類の各文様の差はその形態もさることながら、表現された各文様帯の各单位の数の差に端的にあらわれており、その差は文様帯の見かけ上の細かさに直接的に関係する。I類の紫金山古墳鏡の場合、その各单位の構成数を数えてみると、外区内側の鋸歯文帯〔1〕で百十二個、II類では出土地不明

鏡の場合で百十四個である。文様帯を区分してその数を数えると、獣文帯双魚形〔1〕の左側の乳から、対方の双魚形〔6〕の乳までで、I類で五十六個、II類で五十八個となっている。II類の鋸歯文では、その形が一定しない所があり、小さな鋸歯文が加わる点にその差が表われている。波状文帯〔2〕については計測可能な紫金山古墳鏡の場合で総数八十一波である。II類のものでは全周が明らかにならず、長光寺山古墳出土B鏡と出土地不明鏡が同一の構成を示すため、両者から数えて、総波数七十四波とII類が荒い波形となる。部分的にみても、双魚〔1〕の乳から対向の乳まで、I類で四十、II類で三十四となる。この荒い波形の識別は容易である。外側の鋸歯文帯〔3〕はI類の場合で総数百二十一個であるが、II類では不鮮明ないし欠損のため数えることが不能であるが、部分的に数えた場合、龍形〔2〕前方の乳から、双魚形〔6〕前方の乳まで、I類で四十五個、II類で五十三個となり、II類の方が鋸歯文も小さく、形も不ぞろいであることが明瞭である（第一九・二二図）。なお、亀塚と紫金山鏡を比較すると、基本的にはI類の形をとるが、湯口部分では、鋸歯文に明らかな差を一部みせており、I類でも小範囲に修整が加えられている。

外区の各文様を比較した場合、これまで説明した如くI類に属する形をもつ鏡は、亀塚古墳鏡、野中古墳鏡、紫金山古墳鏡、長光寺山古墳A鏡の四面で、各形の基本的な形態、数にも差がないと云える。これに対し、II類に属するものは、伝伊勢鏡、奈良県出土鏡、長光寺山古墳B鏡、免ヶ平古墳鏡、出土地不明鏡の五面がこの群に入る。I類とII類の文様の差は、I類の原型から范型に再度彫り直された結果であると思われる。例えば、長光寺山古墳B鏡の波文帯の場合、双魚形〔1〕の頭部に縦方向の亀裂があり、これを境いに、右

II類



(5) 長光寺山古墳B鏡



(6) 出土地不明鏡



(7) 伝伊勢鏡



(8) 免ヶ平古墳鏡

I類



(1) 亀塚古墳



(2) 紫金山古墳鏡



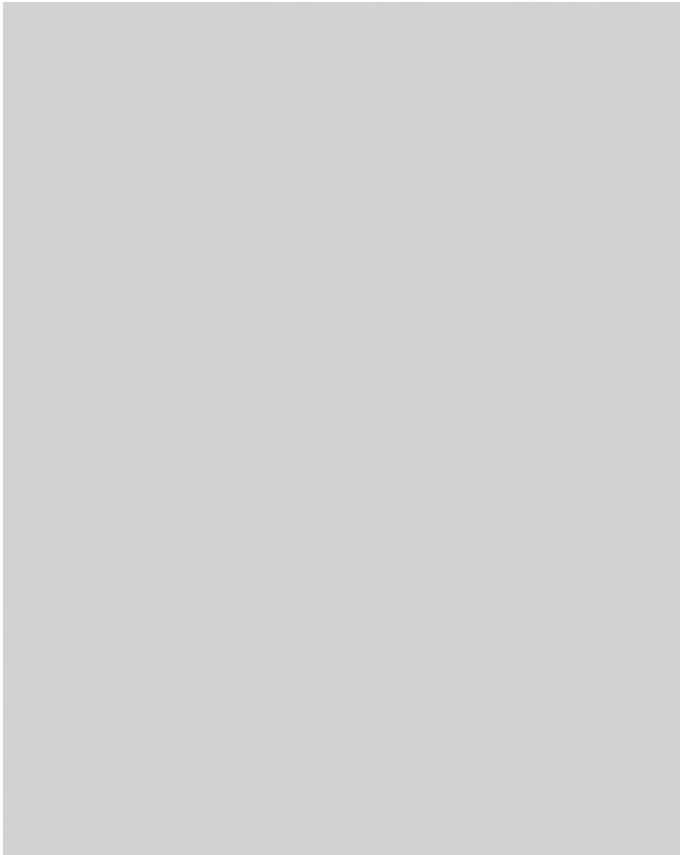
(3) 野中古墳鏡



(4) 長光寺山古墳A鏡

第15図 外区文様帯の細部

方はI類の波状文形であるのに対し、左方はI類とは異なつた荒いII類の波状文が新たにめぐらされている(第一五図6)。この現象は他のII類の文様を通じて観察できることで、外区文様の再度の彫り直しは、范型の文様帯の消失にあわせ、部分的に彫り加えられていることを示している。そのため、原型と彫り直し部の接点部分では、文様の連続性に不統一な形として表わされている。II類の外区文様の表現の鮮映度、欠落さを考えて、范型のくずれの度を想定してみた場合、その順序は長光寺山古墳B鏡、出土地不明鏡、伝伊勢鏡、奈良県出土鏡、免ヶ平古墳鏡の順となろう。また、II類に属するもので、II類の文様に再度加えられた新しい文様の構成をみることはできない。



第16図 范型剝離補修痕

以上、内区、獸文帯、外区の各像及び各形の構成と、それに加えられたいくつかの修整を略述してみた。九面の鏡のうち、各文様は二つの群、すなわち、I類・II類の文様構成にまとまる事が明瞭となつた。また、各類のなかでの再度の大きな修整はなかつたと結論できる状況でもある。

各鏡と各像の特徴的な修整とその類型を一覧すると別表のようになる(第一表)。

次に鏡背文様中であられた范型の亀裂、文様の磨滅、剝離とその補修などの鑄造技法上の点についても考えてみたい。

湯口は先述の如く、図版で示した位置で左側、内区の神像〔3〕と獸形〔2〕の間であろうことは、全鏡を通じてこの部分の文様表出が異常に悪い点からも指摘出来る。この位置と対向する側も文様が不鮮明なものもあり、湯まわりに関係する現象と考えられる。

范型の亀裂は、各鏡とも存在するが(第一図)、共通した亀裂も存在する一方、消滅していく亀裂、新たに見られる亀裂など、各鏡に差がある。図示した如く、亀裂の方向と、鏡の破損箇所とは密接な関係があると考えられる。例えば、野中古墳鏡の場合、左方の折損している部分は、紫金山古墳鏡の亀裂痕の位置と合致するし、上方の欠損部は長光寺古墳B鏡の欠損部分や、出土地不明鏡、紫金山古墳鏡の亀裂痕とも一致する。さらに、下方の欠損部についても、その箇所は長光寺古墳B鏡の欠損部の位置と関連するものである。

范型の剝離とその補修痕については、文様の再刻と一体のものである。紫金山古墳鏡の例では、蛙形〔5〕の外方の外区部分に楕円形の細かい線が確認できる(第一六図)。この痕跡は范型の剝離を再度埋め、そのあとに文様を刻した例の一つである。同鏡の湯口部分にみられ

		内 区			獸 文 帶					外 区			
		神像 (1) (3) (5)	獸形 (2) (4) (6)	松毬形	双魚形 (1) (6)	龍形 (2) (4) (7) (9)	獸形 (3) (8)	蛙形 (5) (10)	二重の圈線	獸形 (8)の凸部	鋸齒文帶(例)	波文帶	鋸齒文帶(例)
1	亀 塚	I	I	○	I	I	I	I	無	無	I	I	I
2	野 中	I	I	○	I	I [△]	△	I	無	△	I	I	I
3	紫金山	I	I	○	I	I	I	I	無	有	I	I	I
4	長光寺山A	II	II	○	I	I [△]	I [△]	I	無	△	I	I	I
5	長光寺山B	II	II	○	II	II [△]	II [△]	II	有	有	II	II	II
6	出土地不明	II	II	○	II	II	II	II	有	有	II	II	II
7	伝伊勢	II	II	○	II	II [△]	II [△]	II	有	有	II	II	II
8	奈 良	II	II	○	II	II	II	II	有	有	II	II	II
9	免ヶ平	II	II	○	II	II	II	II	有	有	II	II	II

※△欠除のため一部不明
 ※松毬形については、修整の状況が範の摩滅により充分明らかでない。

第1表 鏡背文様の類型

る数本の亀裂痕も、剝離痕跡とも考えられるし、同部分と同じ痕跡は伝伊勢鏡、奈良県出土鏡に明瞭である。他のII類の鏡には痕跡の度合や磨滅の状況に差があるが、いつまでも剝離痕が残存していることが明らかである。小部分の剝離痕とその補修の様相は出土地不明鏡の龍形〔2〕や双魚形〔1〕の部分の外区にもみられ、他の鏡にもその痕跡をみることができ。剝離痕を抜本的に補修しない場合もあったことは、獸文帯中の獸形〔8〕の部分に典型的である。しかし、その場合にも、櫛歯文が加えられている鏡があり、全面補修をせず補刻を加える例もあることを知る。

文様がほとんど消失または消失しかかった鏡がある。長光寺山古墳A鏡に典型的にみられるように、櫛歯文や外区など、湯口に近い部分に著しい傾向をみせる。範型の傷みによる結果であると考えられるが、残存する文様の構成と再刻される文様とを検討すると、後述するように、製造の過程で同一の範型に文様が補刻されることを具体的に示す事象としてとらえることができる。これは鏡の製造の順序を指摘できることにもなる極めて重要なことでもある。

三、鏡背文様からみた範型と同範鏡

九面の鏡について、その鏡背文様の構成、細部の文様の比較、範型の様相などについて確認できる事実を述べてきた。九面の鏡はその文様構成は同じであるが、文様の細部では二つの類に分かたれることも指摘した。I類とII類に区分した各像や文様帯は、それ自体を単独で比較した場合、全く別の形態を示すもので、その集合である一枚の鏡は全く別の型式の鏡に属するかのようである。I類・II類はそれぞれ別の範型から製造されたとき様相さえみせる。しかし、I群・II群に分かれる文様や範型の傷や亀裂痕を詳細に比較すると、各九面の鏡には共通した部分の存在や、二つの類が同じ範型から成ったものである幾つかの要素が指摘できる。

第一表のごとく、九面の鏡を文様から類別すると次のようになる。

- I類 野中古墳鏡、亀塚古墳鏡、紫金山古墳鏡
- II類 伝伊勢鏡、奈良県出土鏡、長光寺山古墳B鏡、免ヶ平古墳鏡、出土地不明鏡、
- I類・II類の特徴をもつもの 長光寺山古墳A鏡

以上の分類に加えて、鏡背文様に共通する特徴、各鏡間でみられる特異な傷・亀裂痕、剝離痕とその補修痕などを検討し、各鏡の鑄造に一つの順序的なものを与えて表記すると第二表のようになる。第二表でもわかるように、I類とII類の鏡では文様の様式では別種のように明確にその違いを指摘出来るが、鑄造に際する范型のく

		外区文様の手直し	湯口付近の復み	外区文様の不鮮明度	内区文様の不鮮明度	獸形(8)の櫛齒文の遺存	獸形(8)の剝離痕	亀裂痕の増減	獸文帯の二重圈線	II類の外区	II類の獸文帯	II類の内区	I類の外区	I類の獸文帯	I類の内区	共通の亀裂痕	寸法の共通性
1	塚 中																
2	野 山																
3	紫 金 山																
4	長光寺山A																
5	長光寺山B																
6	出土地不明																
7	伝 伊 勢																
8	奈 良 出 土																
9	免 ケ 平																

第2表 鏡背文様の各変化一覧

ずれの面から、I類とII類の鏡は連続する関係のものであることが確認できる。すなわち、同一の范型が基本となつていていることである。I類・II類の鏡のすべて、または両者の一部にまたがって確認できる范型の特徴をあげてみると、第二表のように亀裂痕、剝離痕などを上げることが出来る。

亀裂痕は紫金山古墳鏡に明瞭に認められる、内区獸形〔2〕の口部から鈕、さらに獸形〔5〕の頭部に至る横方向の亀裂である。この亀裂は長光寺山古墳A・B鏡以下II類の鏡背文様のすべてを通じて観察できるもつとも長い范型の破損である。この亀裂痕も鏡によつて痕跡に差があり、次第にうすれわずかな痕跡を残すまでに変化している。

獸文帯中の獸形〔8〕の范型の剝離痕もI・II類をつなぐ重要な要素である。先述の如く、I類の文様をもつ亀塚古墳では、この部分に剝離が発生していないと考えられる。しかし同類の紫金山古墳では、この剝離が認められ、先鑄時に范型が損傷していることを端的に示す。さらに剝離痕部には、櫛齒文が再刻されている点が重要である。すなわち、范型では、この部分が深く凹んで、獸形がほとんど存在しない状況で、范型の凹の内に櫛齒文を再刻したことになる。同様の剝離痕を示す鏡には長光寺山古墳A鏡がある。このほかこの部分が欠損する長光寺山古墳A鏡を除き、II類の内区文様の構成をもつ鏡にはすべての痕跡が認められる。

I類からII類への文様修整の過程を具体的に示す鏡に長光寺山古墳A鏡がある。この鏡の文様は表でも明らかかなように、I類とII類の文様構成が混在している点に注意される。すなわち、内区の神獸および獸形はII類に属するものであるにもかかわらず、獸文帯と外区の文様はI類に属する構成内容を示す。内区の各像は、その彫り

がきわめて鮮明であるのに対し、獸文帯の各像は鮮明さに欠けるし、櫛歯文や外区の各文様帯も、無文様に近いほど鮮明さに欠ける点が著しい。さらに獸文帯の蛙〔5〕の外方にみえる二重の圏線も存在していない。

この鏡は、I類の鏡の範型に手直しを施し、内区の各像を新たに彫り直したもので、獸文帯と外区の文様には彫り直しの手を加えなかったことを示したものである。紫金山古墳鏡にみられた内区獸形〔2〕から鈕にかけてみられた範型の横われの傷痕は、一部が残っており、内区の像は一部旧形を残しながら再刻されてゆくことを教える。

長光寺山古墳A鏡が、I類とII類の文様構成の鏡の接点に位置する特徴をもつものとする、この鏡とII類の文様構成の鏡群との関連が注意される。II類の鏡群のなかで、もつとも文様の鮮鋭度がすぐれており、範型の傷みの少ないものに長光寺山古墳B鏡があげられる。長光寺山古墳B鏡は、同古墳A鏡の内区の文様（II類）をそのまま受けつぐが、A鏡で铸上りの不良箇所が著しかった獸文帯と外区の外文様帯に、新たな文様（II類）を彫り直して登場し、この文様構成が、のちII類に属する出土地不明鏡、伝伊勢鏡、奈良県出土鏡、免ヶ平古墳鏡にそのまま受けつがれている。獸文帯の二重の圏線もこの鏡の範型から始まってゆく。獸文帯および外区の文様の鮮明さや、湯口付近にみられる範型のくずれもみられないことは重要である。さらに、この鏡には紫金山古墳鏡にみられた獸文帯中の獸形〔8〕の範型剝離痕が、その上面に櫛歯文を残して存在する。また、内区の獸形〔2〕から鈕にかけて横方向にある亀裂痕もその痕跡を残しており、I類の鏡の範型がそのまま文様をかえて使用されている具体的な事実を指摘することができる。

この長光寺山古墳B鏡の文様構成でもって、三角縁獸文帯三神三獸鏡の文様はI類と文様細部が異なった鏡として姿をかえるわけである。以後、II類の四面の鏡は本鏡の文様をそのままの特徴をもつて铸造される。

以上、九面の同文様の鏡を比較したとき、範型に生ずるさまざまな物理的変化を修整しつつ、鏡のもつとも重要な要素の一つである文様構成を、基本的には踏襲しつつ、文様に手直しを加え铸造していくことが確認される。鏡背文様には、この文様の変化の状況

・奈良県出土鏡は現存地不明のため計測不可。
 ・内区径は内区界圏距離文帯の端部。
 ・外区径は外区波状文帯と外方の櫛歯文帯の間の圏界部。
 ・計測位置は双魚形の位置。

		直径	内区径	外区径	三角縁厚
I類	1 亀塚	21.62	11.83	18.46	0.89
	2 野中	(21.52)	(11.76)		0.79
	3 紫金山	21.63	11.83	18.42	0.80
中間形	4 長光寺山A	21.63	11.845		0.83
II類	5 長光寺山B	21.60	11.86		0.68
	6 出土地不明	21.62	11.91	18.46	0.79
	7 伝伊勢	21.57	11.83	18.42	0.80
	8 奈良県出土				
	9 免ヶ平	21.68	11.80	18.58	0.98

※奈良県出土鏡は実鏡が存在不明のため除く。
 ※（ ）の数字は復原径である。

第3表 三神三獸鏡計測表

や製造時に范型が受ける物理的な結果を、特徴的に示しているものであることも確認できる。本論中に、すでに本型式の鏡が同一の范型から製造されたものである、すなわち同范鏡である可能性を、幾つかの象徴的な特徴をあげ説明を加えた。しかし、九面の鏡が同范鏡であることを結論づけるには、まだいくつかの説明が必要であることは自明である。

第三表は、八面の鏡について、各部の寸法を計測したものである。計測は一定の位置を基本にして測つたもので、野中古墳鏡の例のように折損したものは、旧状に復して計測を加えた。

計測の結果、直径は二一・六センチ前後であるが、周縁の研磨によつて各鏡に若干づつの差がある。内外区の計測寸法についてみると、各鏡ともきわめて近似した数値であることが第一に指摘される。I類に置いた三面の鏡のうち、計測可能な亀塚・紫金山鏡の場合、内区径でミリメートル以下での差であり、外区径でも同様である。

この差は計測時の誤差の範囲に許容されるものである。II類の場合でも、内区径でもっとも大きいのは出土地不明鏡の一・九一センチ、最少で免ヶ平鏡で一・八〇センチでその差は〇・一一センチである。また外区径についてみると、免ヶ平鏡の一・五八センチ、伝伊勢鏡で一・四二センチ、その差は〇・一六センチである。I・II類を通じての計測値をみても、極端な数値のばらつきはなく、計測値からは特異な徴候を得ることはできないと考えられる。

この計測数値の近似性は極めて重要な意味をもつ。まず、冶金工学的な製造時の金属の収縮の問題である。一般的にはその収縮率は原型の大きさより数%縮少するといわれている。計測した七面の鏡のうち、その大きさの差が各鏡ごとに収縮率に見合うだけの数値の

変化はまったく読みとることはできないといつて良い。

同一文様をもつ鏡の製造の方法には、同じ范型で複数の同范鏡を製造する考え方。一つの基本の鏡から複数の范をおこし、各范から一枚づつ複数の鏡を得る同型鏡の考え方。原形の鏡から范型をおこし、それから製品を得る踏返しの考え方。などがある。同型鏡の場合は、製造された鏡は原型と変わらない文様内容と大きさをもつ複数の鏡が製作されるし、踏返しの場合では、原型の文様と同様なものがつくられる反面、その大きさには収縮による差が生じてやや小形の鏡となる。踏返しをくり返せば、その大きさや文様の構成に差が生じて来ることは明らかである。もちろん、I類とII類の文様が混在して鑄出された本鏡の型式の鑄造や范型の補刻や補修は、同型鏡の場合は在り得ないことであり、また必要のないことでもある。踏み返しの場合、複数の鑄造の過程でこうした文様の組合せや、范型の修整も考えられるが、何より踏返しによる大きさの変化の問題はその製品に直接的に反映して来ることは充分予想できる。

以上論述してきたように、九面の鏡は、同一の范から一面づつ順に鑄造された同范鏡であると結論づけなければならない。鑄造ごとに際しての范型の物理的な損傷は、その抜本的な修整や部分的な補修を加えながら、消耗しきるまで同范鏡を鑄造しつづけたと考える。その修整や補修が九面の鏡に直接的に反映しているわけである。文様内容がまったく変わるまで使用に耐えた范型の原材は何であったのか、どのような構造を施してあるのか直ちに言及できないが、小林行雄氏の研究でも述べられる如く、その范型は補修の可能性を十分考えられる真土を用いた范型であったとするのがもっとも妥当であると思われる。

九面の鏡が鑄造された順序は、I類からII類の文様の變化でも明らかであるが、I類の野中古墳鏡が破損箇所が多く比較材料にとほしいが、第三表に示したように、種々の様相をまとめてみて、亀塚古墳鏡から免ヶ平古墳鏡にかけ順次鑄造されたと思われる。また、文様の鑄上がりが良好の鏡は、范型の文様面に補修や本格的な修整が加えられた結果と認められる点が多いことから、もつとも原型に近いと考えられる亀塚古墳鏡の以前に初鑄の鏡の存在も予想される。また各鏡の間に新たに加わる鏡の存在も考えられることを考慮してみると、一つの范型から鑄造される鏡の面数は十面以上に達した可能性を想定できる。

四、三角縁唐草文帯二神二獸鏡の范型

仿製の三角縁神獸鏡に対して、それまでその文様構成などから舶載された三角縁神獸鏡の各型式群が存在する。はじめに言及したように、舶載の三角縁神獸鏡についても、その生産地や工人の問題について、これまでの考え方と異なつた考え方もあるが、ここでは、いわゆる仿製鏡の類と、舶載鏡といわれる鏡群との間に、鏡背文様に表われた技法上の差があるか否かを検討するため、あえてその製作地等については進んで言及しない。

舶載の三角縁神獸鏡について、これまで仿製鏡でみてきた同じ方法で観察した場合での両者の差について考えてみる。

資料としてとり上げた鏡は、天・王・日・月・唐草文帯二神二獸鏡(単像式)で、小林行雄氏の型式分類では、型式番号四四に属する同文様の鏡である。

出土地は次のようである。

- | | |
|------------------------|-----|
| 一 東之宮古墳 (愛知県犬山市白山市) | 一面 |
| 二 長塚古墳 (岐阜県大垣市矢道町) | 一面 |
| 三 円満寺古墳 (岐阜県海津郡南濃町庭田) | 一面 |
| 四 佐味田宝塚古墳 (奈良県北葛城郡河合町) | 一面分 |
| 五 南原古墳 (京都府長岡京市長法寺) | 二面 |
| 六 西車塚古墳 (京都府綴喜郡八幡町大芝) | 一面 |
| 七 ヘボソ塚古墳 (神戸市東灘区本山町岡本) | 一面 |

以上、七古墳八面の鏡が知られている(第二六、第三三圖)。本型式の鏡は、いわゆる舶載鏡のなかでもつとも面数の多いものである。

各鏡は保存状況に差があり、完存するものはわずか東之宮古墳鏡、南原古墳A鏡の二面のみである。あとの鏡は大なり小なり破損している。うち南原古墳B鏡は接合によつて完形をなす。佐味田宝塚古墳鏡は小片に破砕して全形を知り得ない。他のものは、破損したままのもの(長塚古墳)や、その後の補修によつて全形をうかがい知れるものばかりである。補修も接合が不完全なものもあり、例えば西車塚古墳鏡では、天・王・日・月と右まわりに置かれるのが正常であるにもかかわらず、天・日・王・月と置かれており、その位置も正確でない。また外区全体も九〇度方向をあやまつて接合補修されている。唐草文帯の欠損が多い点から接合をあやまつたものである。円満寺古墳鏡でも接合が不完全である。ヘボソ古墳鏡も唐草文帯を中心に欠損部が多く、補修を加えられているため、図版では唐草文帯など文様が他と異なつて描写されている。

さて、本型式の鏡の鑄造について結論的に述べれば次のようなこ

とを指摘できる。

范型の物理的な破損状況をみると、各鏡とも文様面の范型に起因する亀裂痕や剝離痕が認められる。亀裂痕では、図版のように神像の右側に笠松形が位置するようにした場合、鈕の中心を通り、右側の獣形の顔面の先端を通る横一本の亀裂痕が、観察可能なすべての鏡に共通して見受けられる。また、内区の四乳のうち左右の乳の上を通る縦方向の亀裂痕も全鏡に共通する。右側の乳の傷は獣形の首部を通っている(第三四三六図)。また、部分的には神像と笠松形の間縦方向に亀裂が認められるものがあり、南原古墳B鏡では范の破れが段状に食い違いをみせるし、へぼソ塚鏡はこの部分で破損している。また、東之宮古墳鏡でも范型の破れの痕跡を残している。南原古墳鏡二面の亀裂痕を比較すると、共通した傷のほか、A鏡よりB鏡の方が多くみられるが、これは共通の范型の使用頻度にもとづくものというより、独自の范に加わった物理的要素の差といつてよい。

范型が剝離し、その補修と文様の再刻を施したと考えられる明確な痕跡は、本型式群では明確にできないことが特徴である。ほぼ全鏡を通じて存在する剝離痕は、鈕とその右側が鈕環の間にみられる〇・五センチほどの復原が確認できる程度である。内外区の各文様とも、溶銅のまわりの不良さに原因をもつ描線の不鮮明さが一部に認められる鏡があるが、范型の剝離による文様の補修はまったく認められない。

内区の各文様、唐草文帯や櫛歯文、外区の各文様帯とも乱れもなく、実に鮮明である。外区の文様帯のうち、内側の櫛歯文の数百四十一、波状文の数百五、外側の櫛歯文数百三十と、算出可能な鏡で

はすべて同じ数で施文されており、各文様帯の形も異なっていないことから、文様帯に後補のないことが明らかである。
 なお、文様のうち、外区文様帯には文様の鮮鋭さに若干づつ差があり、とくに笠松形を伴う神像の対方に著しい。この部分が湯口にあたっていると考えられる。外区の文様帯の鮮鋭度をみると、南原古墳A鏡、同B鏡、西車塚鏡、長塚古墳鏡、円満寺古墳鏡、東之宮鏡、へぼソ塚古墳鏡となつてはいるが、この順は鑄造の順序を示すものでない。

以上のように、中国製の三角縁神獸鏡と考えられてきた一型式八面の鏡をみると、先に述べたいわゆる仿製鏡の一群とは、その范

・内区径は内区と唐草文帯との間の界圍線。
 ・外区径は外区外側の櫛歯文と周縁との間の圍線。

		直径	内区径	外区径	備考
1	東之宮	21.45	12.65	18.34	完形
2	長塚	(21.71)			未接合
3	円満寺	21.8	(13.19)	(18.79)	接合不良
4	佐味田宝塚				破片
5	南原A	21.49	12.65	(18.36)	完形
6	南原B	21.43	12.66	(18.33)	完形
7	西車塚	(21.41)	(12.605)	(18.42)	後補
8	へぼソ塚	(21.49)	(12.61)	(18.51)	後補

※ () 内の数字は破損のため現状寸法である。

第4表 二神二獸鏡計測値

象に大きな差があることが明らかで、とくに文様面の剝離に極度の差があることが指摘できる。これは、製品の質的な差が外見上の色調や、溶銅のきめの細かさなどからも判別できることからしても、溶銅材の基本的な差が范型の損傷に直接反映していることも予想されるし、范型それ自体の質的、技術的差に起因することも考えられる。

次に各鏡の計測値を第四表に示す。先述のように、八面の鏡のうち、完形をなすものは、南原古墳A鏡と東之宮古墳鏡の二面である。南原古墳B鏡は鈕座に破砕があるが、計測は可能である。他の鏡は、図版でも明らかかなように、後補が不十分であったり、接合不良や未接合のものもあり、計測値としては不適な条件が多い。計測は同一箇所からおこなったが、完形品以外のものは、現状でもっとも旧形に近い位置で測った。

計測値で明らかかなように、内区および外区の各径の長さは、小数点二位のくらいでの差であつて、この値の違いは計測誤差の範囲におさまる数値である。

これらのことから、船載と考えられる三角縁二神二獸鏡の場合は、細部寸法の同一性、仿製鏡にみられた范型のくずれによる補修示す痕跡がまったく存しない点、また、文様面に残る亀裂痕も共通した傷痕以外に新しく派生し、それが次第に進行するような傷の痕跡が存しないこと、鑄上りがきわめて良好であることなどから、この鏡の鑄造は同じ范型、つまり原鏡から複数の范型をおこし、それぞれの型から鑄出した、いわゆる同型鏡による方法であるといえる。

三 結 語

以上、仿製の三角縁獸文帯三神三獸鏡の同文様の鏡九面と、中国製と考えられてきた、天・王・日・月・唐草文帯二神二獸鏡八面について、各区の像形や文様についてそれぞれ比較し、さらに范型に起因すると考えられる亀裂・剝離の状態、それに伴う文様の補修などを検討してきた。また各鏡の主要部分について計測をおこない、

いくつかの重要な提言をおこなった。

仿製の三角縁獸文帯三神三獸鏡の場合、要約すれば次のことが言える。

- イ、内区と獸文帯の文様はそれぞれ二類に分け得ることができ、外区の彫り直しも二類がある。
 - ロ、I類の文様のみと、II類の文様のみでまとまる鏡群が存在する。
 - ハ、鏡のなかには内区がII類・外区がI類という文様構成をもつ特異な鏡も認められる（長光寺山古墳A鏡）。
 - ニ、各鏡には范型の損傷に起因する亀裂や剝離の痕跡があり、これらの痕跡が存在しない鏡と、共通して存在する鏡がある。さらに、痕跡の度合が進行してゆく状況も把握できる。
 - ホ、外区に一箇所文様の鮮明さが欠ける場所が存在する。この部分が范型の湯口に相当すると思われる。この湯口は区を中心、他の鏡と比較して、きわめて鮮明な像が鏡出されたものがあり（紫金山鏡、長光寺山B鏡）、外区や獸文帯など文様の構成内容も異なることが指摘できる。
 - ヘ、内区・外区など各区の計測寸法は、各鏡とも同様である点は一特徴的である。
 - ト、鈕の紐孔の方向も各鏡同一である。
 - チ、各鏡の文様や亀裂・剝離の痕跡の状況から、各鏡の鑄造の順序が考えられる。さらに、この鏡群のほかに、別の鏡の存在も予想でき、同文様の鏡は十面以上にも達すると考えられる。
- このように、同一形式の鏡背文様をもつ鏡でも、原型の鏡から複

数の鏡が鑄造されてゆく過程で、多くの補修が加えられており、そのなかには、補修の経緯を具体的に示す重要な鏡も存在することがわかる。これまでの考察でも述べたように、この九面の鏡は、すべて同一の範から鑄造された同範鏡である。この場合、原型の文様構成と後鑄の文様との間に、その細部表現の内容に大きな差があるが、その文様の変化の経緯からしても、かりに文様に差が生じても、同一の範型から鑄造されたものであり、同範鏡としてとらえるべきものと考ええる。

同範鏡であると考ええる根拠の一つに、九面の鏡の各部の寸法の同一性を上げることができる。これは極めて重要なことである。¹²一つの原型から複数の範型をつくり上げる、いわゆる同型鏡の場合、原型と二次製品の間には、文様的には同様な構成を示すが、両者には範の物理的な収縮から来る製品の大きさの差が生ずるのは明らかである。また二次製品の複数の鏡はまったくの同型鏡が鑄造され、文様の補修などは存在しても最少のものとなる。また、原型の踏返しの場合でも、原型と二次製品の間には、寸法の差は確実に生じる。

小林行雄氏は仿製三角縁神獸鏡の鑄型を真土型であることを、鏡背文様にみる亀裂、剝離痕の共通性、文様の補刻などによって考察されている。¹³この考察の基本として、大阪・紫金山古墳、岡山・丸山古墳、出土地不詳の泉屋博古館蔵鏡の三面の三角縁唐草文帯三神二獸鏡があげられている。この鏡は、内区、唐草文帯とも共通の文様構成であるにもかかわらず、紫金山古墳鏡に存在しなかった外区の文様帯の珠文が、新たに丸山古墳鏡と泉屋博古館蔵鏡に付加される事実をもっている。また、三面の鏡には、例えば二神並座像の部分に鑄型の剝離痕に共通性があり、三鏡は鑄型が同じであり、外区

の珠文は、後に補刻されたものであるとされている。

一方、近藤喬一氏は、先の三面の鏡について、珠文を外区にもつ丸山古墳鏡・泉屋博古館蔵鏡を同範鏡とし、紫金山古墳鏡を同型鏡の關係とされる。¹⁴この場合の同型鏡とは、鑄型の一部あるいは原型の鏡の一部に手なおしの加えられたものを称しているが、いずれにしても同じ鑄型から鑄造されたものと考えられている。

同じ鑄型を使用した同範鏡であるか、踏返しであるのか、同型鏡であるのかを決定する大きな要素に、鏡背文様にあらわれる各細部の計測寸法の同一性を無視できないことは明らかである。

文様の表現度とその鮮明さについても、鑄造の先後に関連してよく言われることである。これまでみてきたように、文様表現の良否は直ちに鑄造順位を表わすとは言い切れない。原型の範型の損傷による補刻の過程で文様の構成内容の変化と同時に鮮鋭度もその都度異なってくるからである。論述した九面の鏡のうち、範に修整の補刻が加わったのは、紫金山古墳鏡と、長光寺山A鏡、同B鏡で、その文様構成内容からみても引きつづいて鑄造されたと考える方が妥当な点が多くある。II類の文様構成でまとまる長光寺山古墳B鏡以降五面の鏡は、その文様の表現内容を見ると、範型に起因する損傷後が次第に多くなっている。I類の文様でしめる前半の同一範型の手直しと、後半のII類では手直しの度合に大きな差があり、II類ではほとんど手直しを範型に加えていないことが知れる。その原因は明らかにし得ないが重要なことである。

一つの原型の範型が、補修を受けながら多数の鏡の鑄造に用いられたと推考したが、こうした多数の鑄造に耐える原範は、補修の可能である真土型が用いられたことは十分想定できる。ただ、原範の

製作技術や、その形態、鑄造の技術については適切な解答を用意していない。同一の真土型の範型から多数の鏡の鑄造は不能であったとする今日的な考えでは、まだまだ説明を必要とすることが多いからである。

仿製の三角縁神獸鏡と、中国製と考えられている三角縁神獸鏡とは、その製品に明らか技術的差が認められる。範型に加えらるる補修の有無、文様の鮮鋭度、銅質の外見的な差異など大きな差となっている。最近の研究による鏡の溶銅の質的な差が、仿製・中国製の鏡にみられるという見解は、製品やその範型に直接関連しているとも考えられる。中国製の鏡の文様の在り方は、別の考えをとれば原型から複数の範型をとり出した、いわゆる同型鏡の考え方に成りたとう。文様にみえる亀裂痕は、原型に存在したもので、増加する亀裂は、各範型の焼成とその収縮によって生じた二次的な亀裂と考え得れば、説明が可能であるからである。

小林行雄氏の型式分類によっても、同範関係にある舶載の三角縁神獸鏡は、六十二型式百七十面以上、仿製の三角縁神獸鏡は十六型式七十面以上に達している。

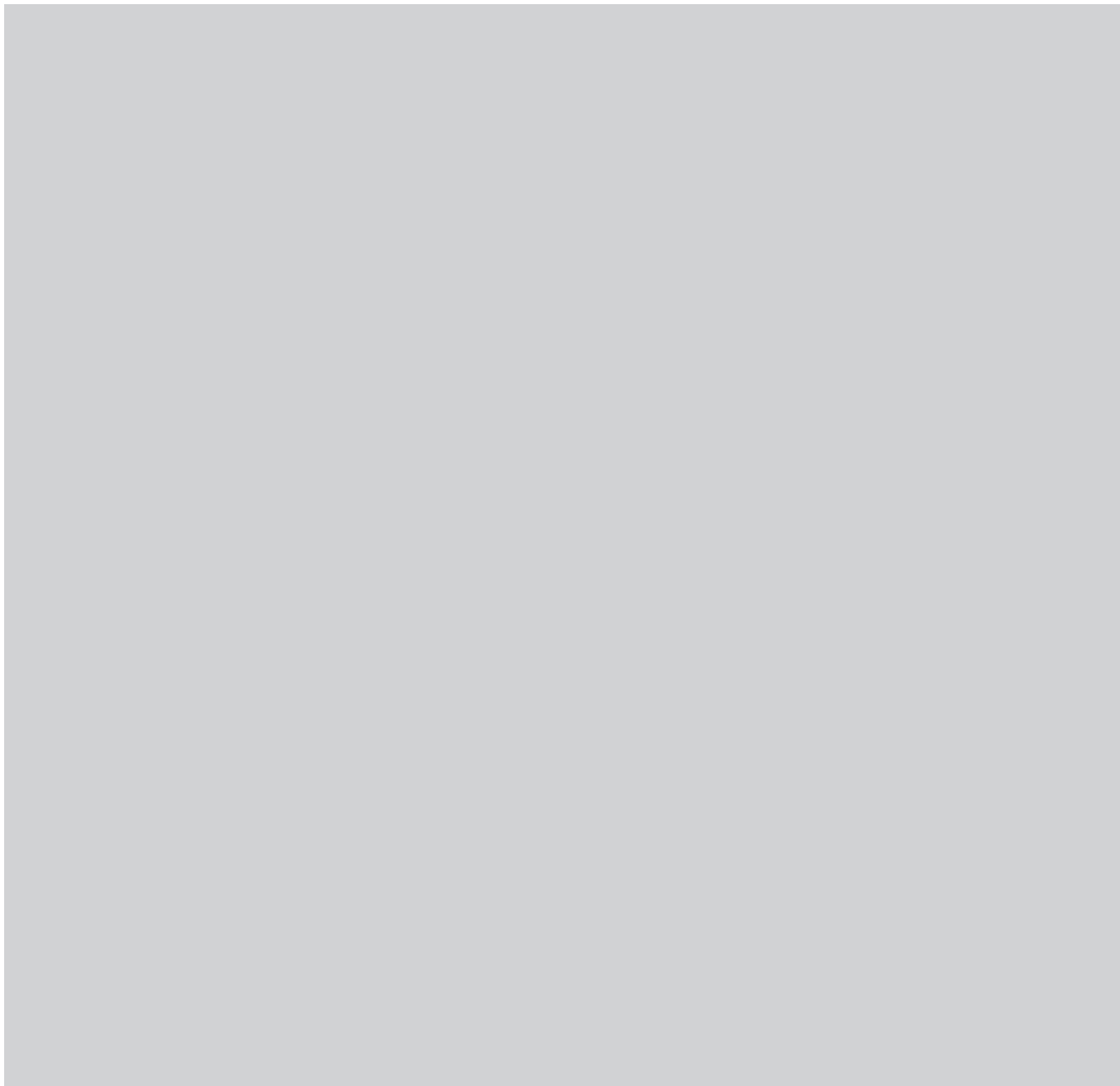
これらの同範鏡と考えられている各型式でその文様の在り方はどうであるのか、更に検討の必要がある。また、同じ範でありながら文様構成の異なる鏡は、同範鏡であるのか否か等、問題は多岐である。さらに、鑄造技術の問題に加えて、鏡の製作にともなう、社会組織の在り方など重要な課題がある。長光寺山古墳の如く、連続して鑄造されたと考えられる二面の鏡が、同一古墳に副葬される事実など、分布についても極めて興味ある問題が存在する。

例えば、範型が唯の所でどのような組織のもとで維持され、鑄造

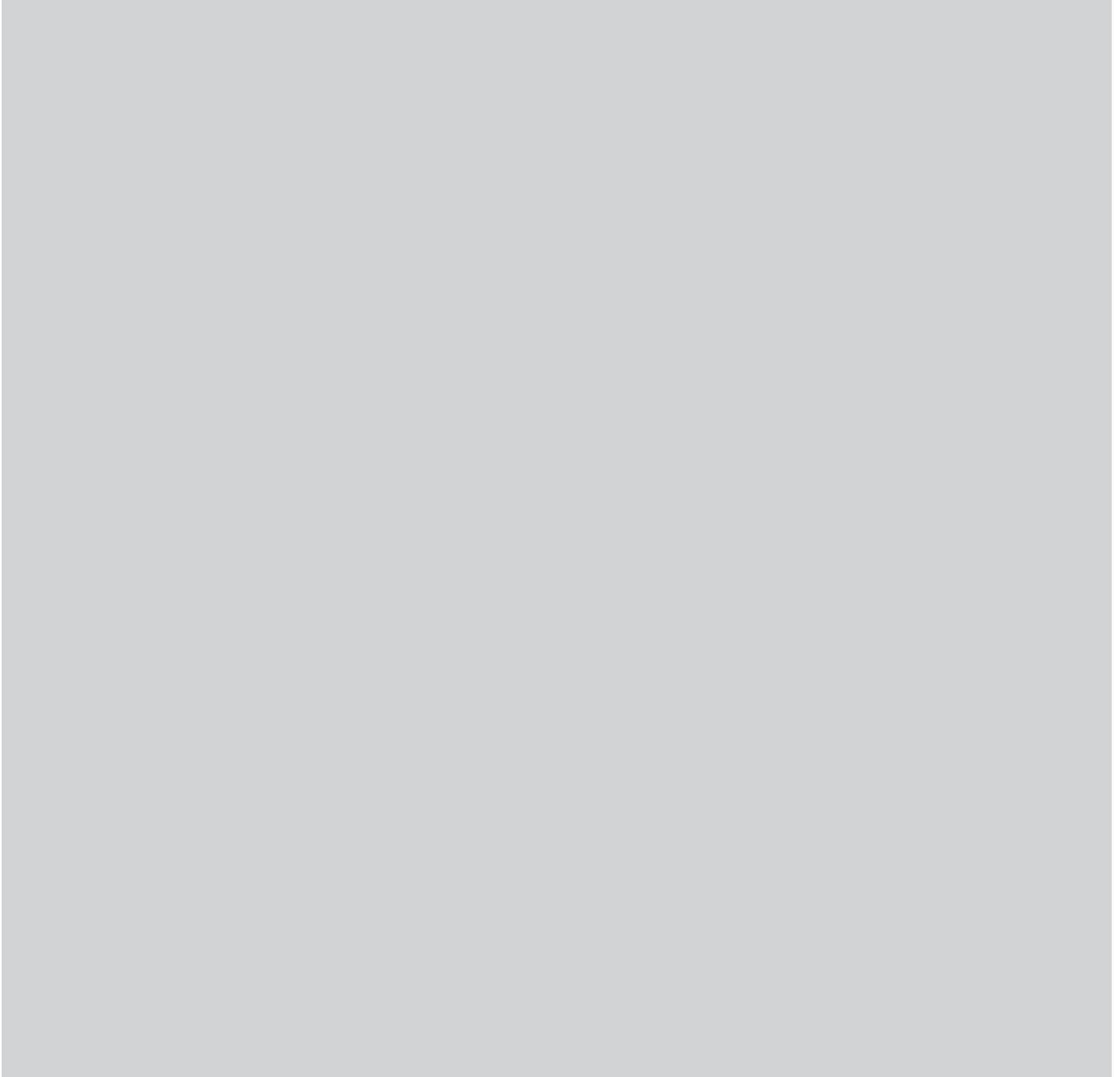
が進められたのか。またその場所は何処なのか。これまで考えられてきたように、分与という関係で鏡の授受がおこなわれた場合、鏡の鑄造は授受に対してどのような形でおこなわれたのか。同一の範型であれば、同範鏡の鑄造は連続しておこなわれ、たえず複数の鏡が所持者の所にあつたのか、それとも、分与のつど新たに鑄造されてゆくのか。など多くの問題が残っている。先述のように、今回とりあげた九面の同範鏡の関係では、本範型のほかに踏返しなどによって別型が存在した形跡はない。このことは、分与などを受けて所有した鏡を、さらに地域をはなれた所で新たに範型を作成し二次的に鑄造分与がおこなうことがなかつたことを示している。すなわち、三角縁神獸鏡の鑄造には一定の規律性があつたことを推測させる。また、技術的にみても、舶載鏡と考える一群の鏡が同型鏡の技法で鑄造されたとする、仿製鏡はなぜ同型鏡の技法で鑄造されなかつたかという大きな問題である。舶載鏡の一群の工人と、仿製鏡の工人とは製作技術に決定的な差があるとすると、両者の工人組織の在り方にも技術交流にままならぬものが介在したことを推測せしめることにもなる。鉛の同位元素の差が両者の間に在ることの指摘は、きわめて重要な意味をもつものである。

小論では、九面の鏡についての同範の事実を多角的に指摘したが、他の型式の鏡や、舶載鏡・仿製鏡のもつ問題は、今後の調査にまつところが大きい。

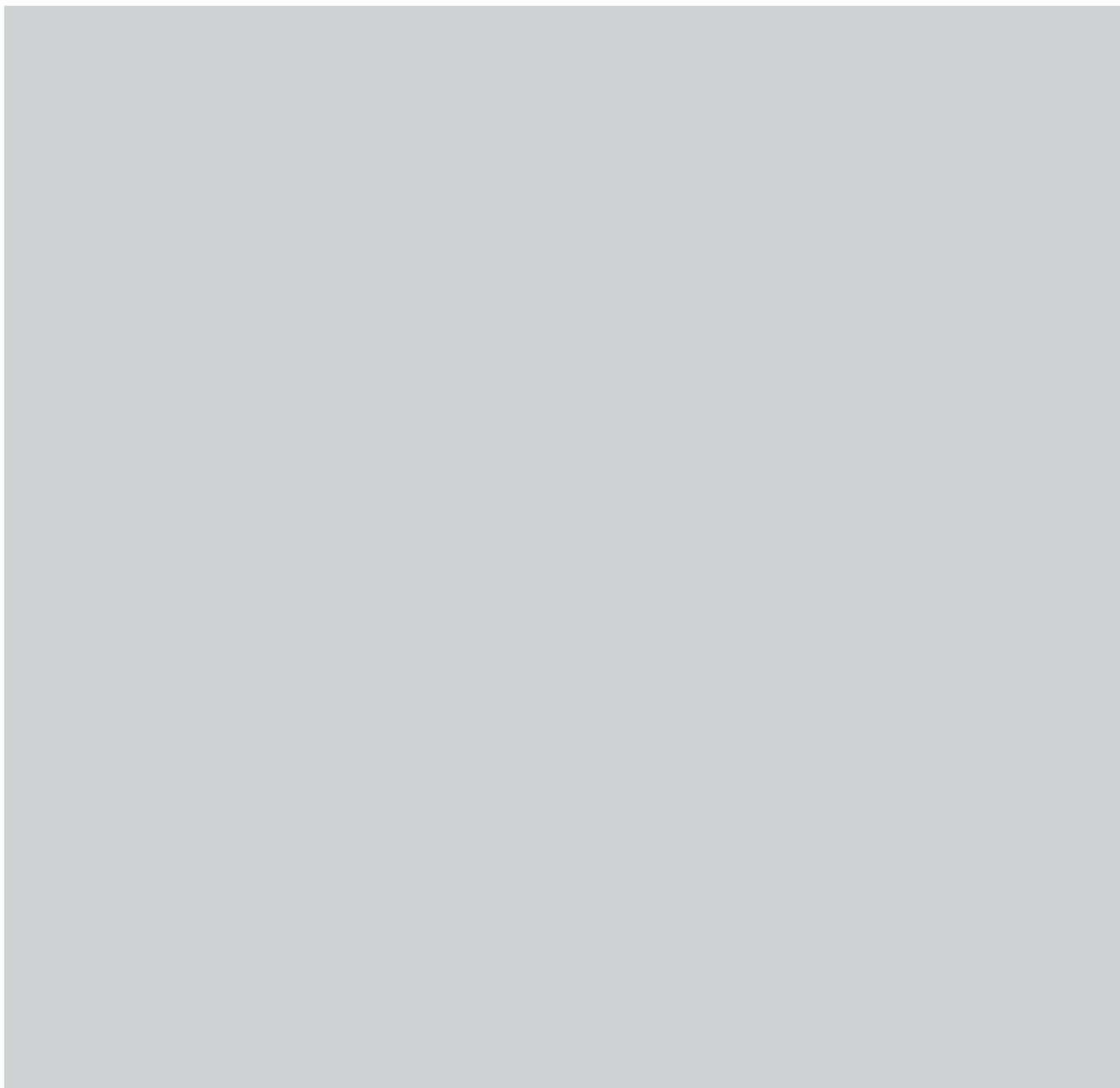
- 1 王仲殊「日本の三角縁神獸鏡に関する問題」(『歴史と人物』一九八一杉本憲司訳)
- 2 同範鏡については、諸説があるが、考古学辞典によれば次のように考えられている。
同範鏡・同じ鑄型(範)を用いて鑄造した鏡。(中略)。一つの鑄型から数面以上の鏡が鑄造できるのは石型か金属型であって、砂型によって同一同文の鏡を数面つくるには、原模から踏返しによって数個の鑄型をつくり出す方法による。これは同型鏡という。(樋口隆康『世界考古学辞典』(平凡社一九七九))
- 同範鏡・同一の鑄型または原型を使用して鑄造された鏡をいう。中国鏡では魏の三角縁神獸鏡より唐鏡におよび、仿製鏡では三神三獸鏡より鈴鏡におよぶ実例が知られる。鑄型が同一である場合には、反復使用によって生じた鑄型の損傷が鏡背にあらわれ、鑄造の先後を推定しうることがわかる。(略) 小林行雄『考古学辞典』(創元社一九五九)。
- 同型鏡・同じ大きさで、同じ図文の鏡が二面以上ある場合、これを同型鏡という。これらが、一つの鑄型から鑄造された場合は同範鏡というが、それは石製の範で線文の簡単な図文に限られる。一般の鏡は砂型でつくられるが、この場合は一つの原模から多くの鑄型をつくって一面づつ鑄造する。(以下略) (樋口隆康『世界考古学辞典』)
- 踏返し・一つの品物を原型として、砂または粘土などに押しつけて雌型を得、熔銅を流して原型と同じ型製品を得る作業。(中略)踏返しして得た製品は主として熔銅の冷却時の収縮により原型よりいくぶん小さくなる。また、文様などの表出も原型より鈍くなる。(中略)中国魏代の三角縁神獸鏡および古墳時代の仿製三角縁神獸鏡には、同範鏡もしくは同型鏡が多数知られるが、一つの鏡を原型として踏返したと認められるものか、ごく少数例であるが知られている。(近藤喬一『世界考古学辞典』)
- 3 小林行雄『仿製三角縁神獸鏡の研究』(『古墳文化論考』平凡社一九七六)
- 4 小林行雄氏の仿製三角縁神獸鏡の型式分類のうち一〇六K2型式にあ
- 5 岐阜県史原始編(岐阜県教育委員会一九七二)
- 6 亀塚古墳鏡は、小林行雄氏の型式分類では一一一型式に含まれていたものであるが、一〇六型式に属するものである。
- 7 紫金山古墳出土鏡については、小林行雄氏の御配慮と多くの助言をたまわった。
- 8 富岡謙蔵『古鏡の研究』大正九年図版第五七の二より複写。
『長光寺山古墳』(山陽町教育委員会一九七七)
- 9 小田富士雄『免ヶ平古墳』(『日本考古学年報25』一九七二)。
- 10 神像・獸形とも細部では各面の鑄造時にごく少ないが手直しの再刻がみられるものが存する。
- 11 計測の基線となる内外区の圏線は、櫛齒文・鑄齒文・波状文の修正があり、その際若干の線の彫り直しがあつたかも知れないが、比較検討では、ほとんどその位置には手が加わっておらず、原形を良くとどめているといえる。
- 12 註3参照
- 13 近藤喬一「三角縁神獸鏡の仿製について」(『考古学雑誌第五十九巻第二号』一九七二)
- 14 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究一・二」(『ミューゼウム三七〇・三八二』一九八二・一九八三)
- 15 第37・38図は京都府長岡付近の出土の三角縁神獸鏡である。この鏡はまったく異なった範型の破片を組合せ接合し一枚の範型にして鑄造したものである。接合面には真土を補添している。神像・獸型、鋸齒文も形を異にするし、松毬形も獸文帯に配される。小さく破れた別範を組合せても鏡を鑄造できること、範がいかに残され使用されたかを知る貴重な例である。
- 16 本研究に際し、小林行雄氏・田中琢氏・佐原真氏・本村豪章氏・甲斐忠彦氏、三輪嘉六氏、文化庁、東京国立博物館・可児町教育委員会・岐阜県立博物館・京都大学考古学研究室・山陽町教育委員会・大分県宇佐風土記丘資料館はじめ多くの方々の助言と御配慮をいただいた。感謝の意を示したい。なお、写真はすべて筆者の撮影による。



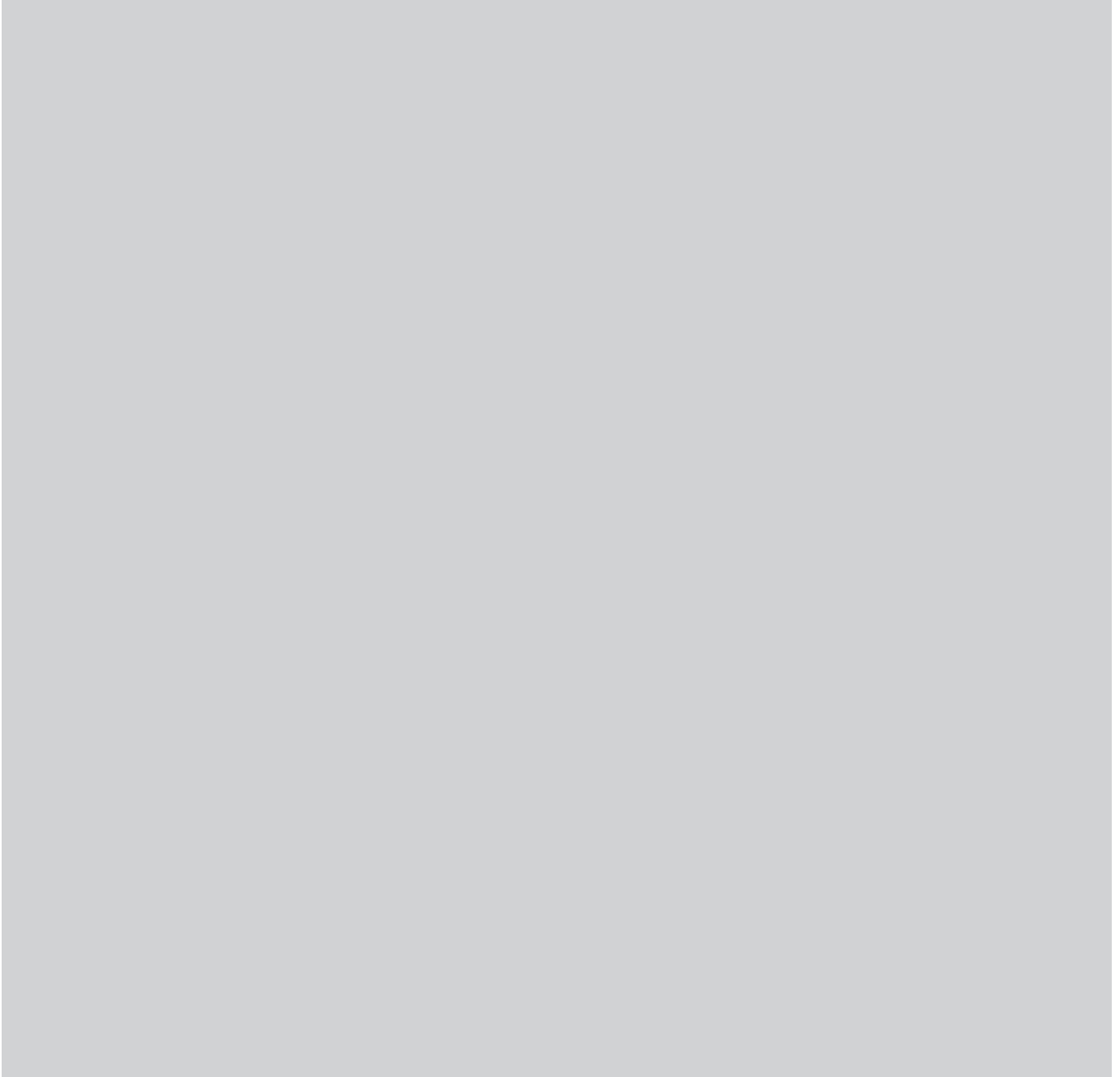
第17図 亀塚古墳出土鏡



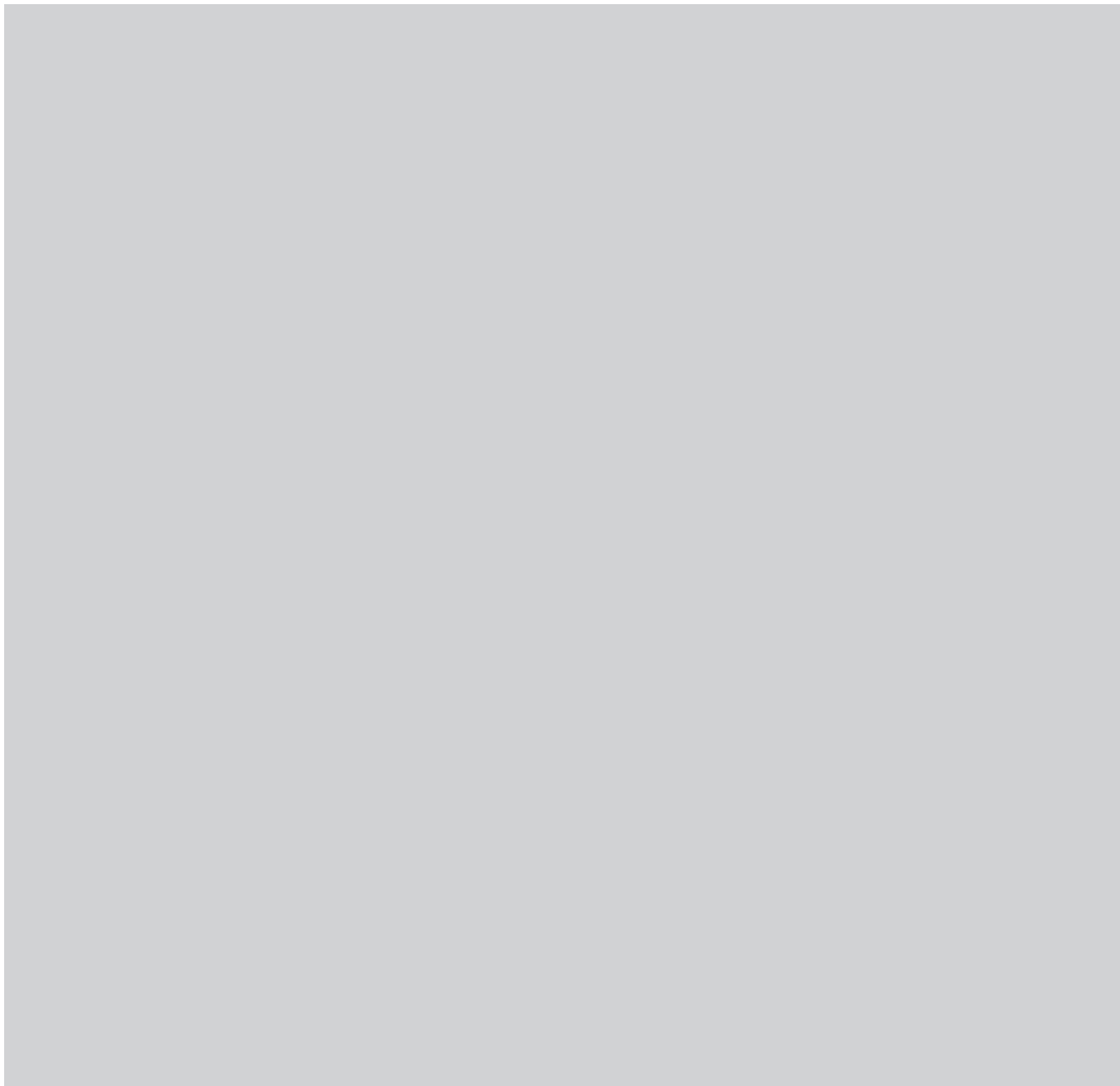
第18図 野中古墳出土鏡



第19図 紫金山古墳出土鏡



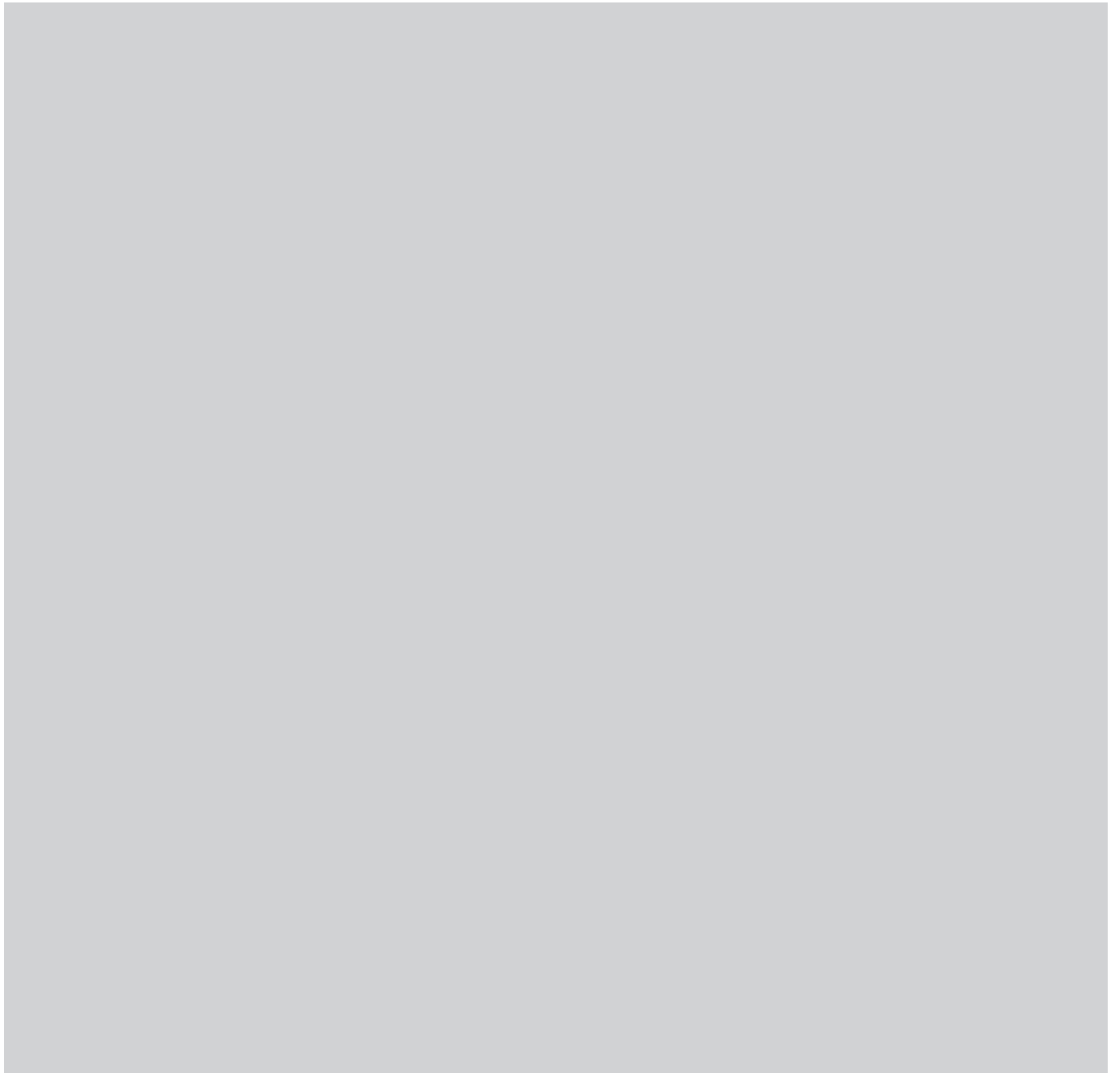
第20図 長光寺山古墳出土A鏡



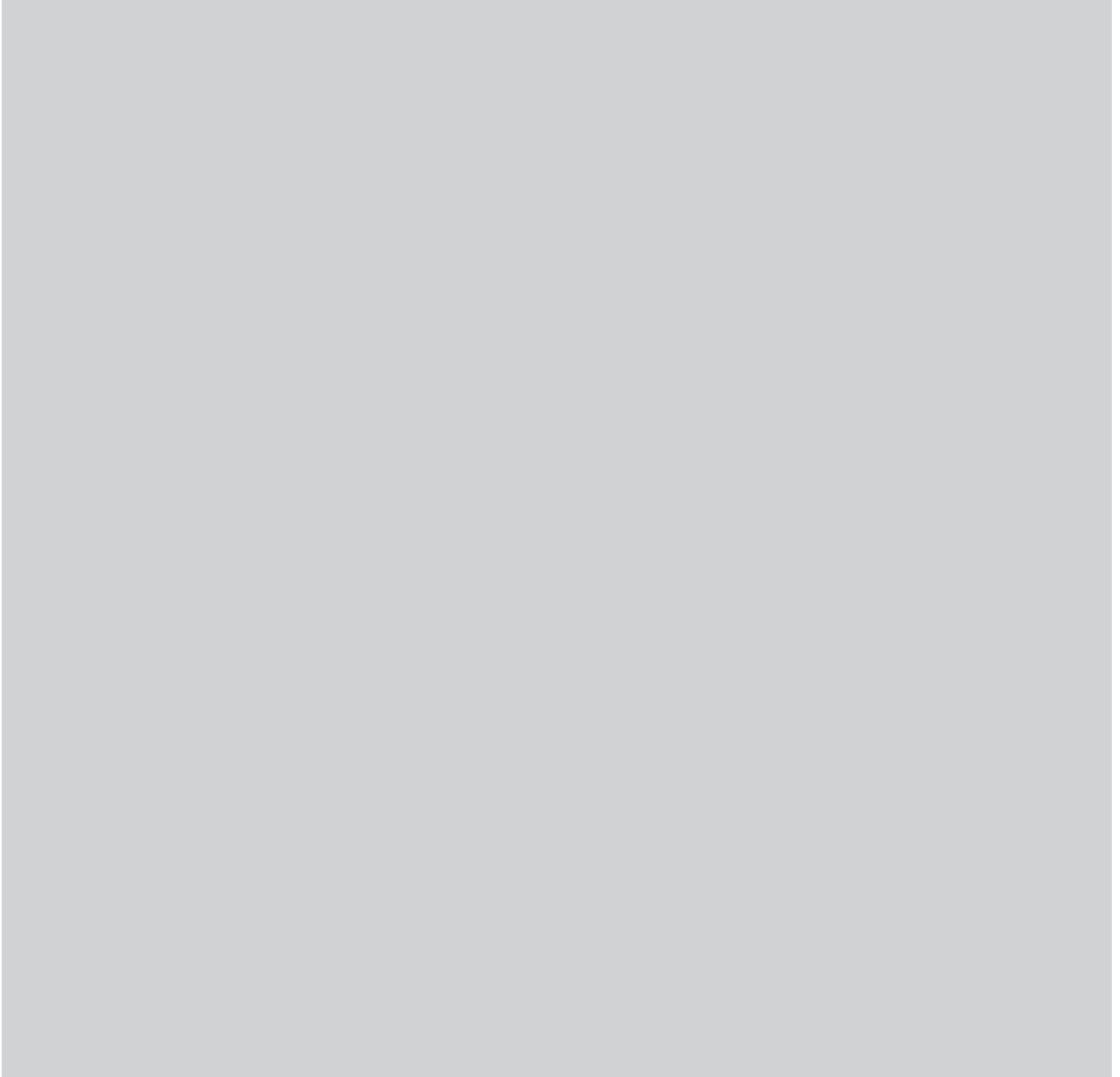
第21図 長光寺山古墳出土B鏡



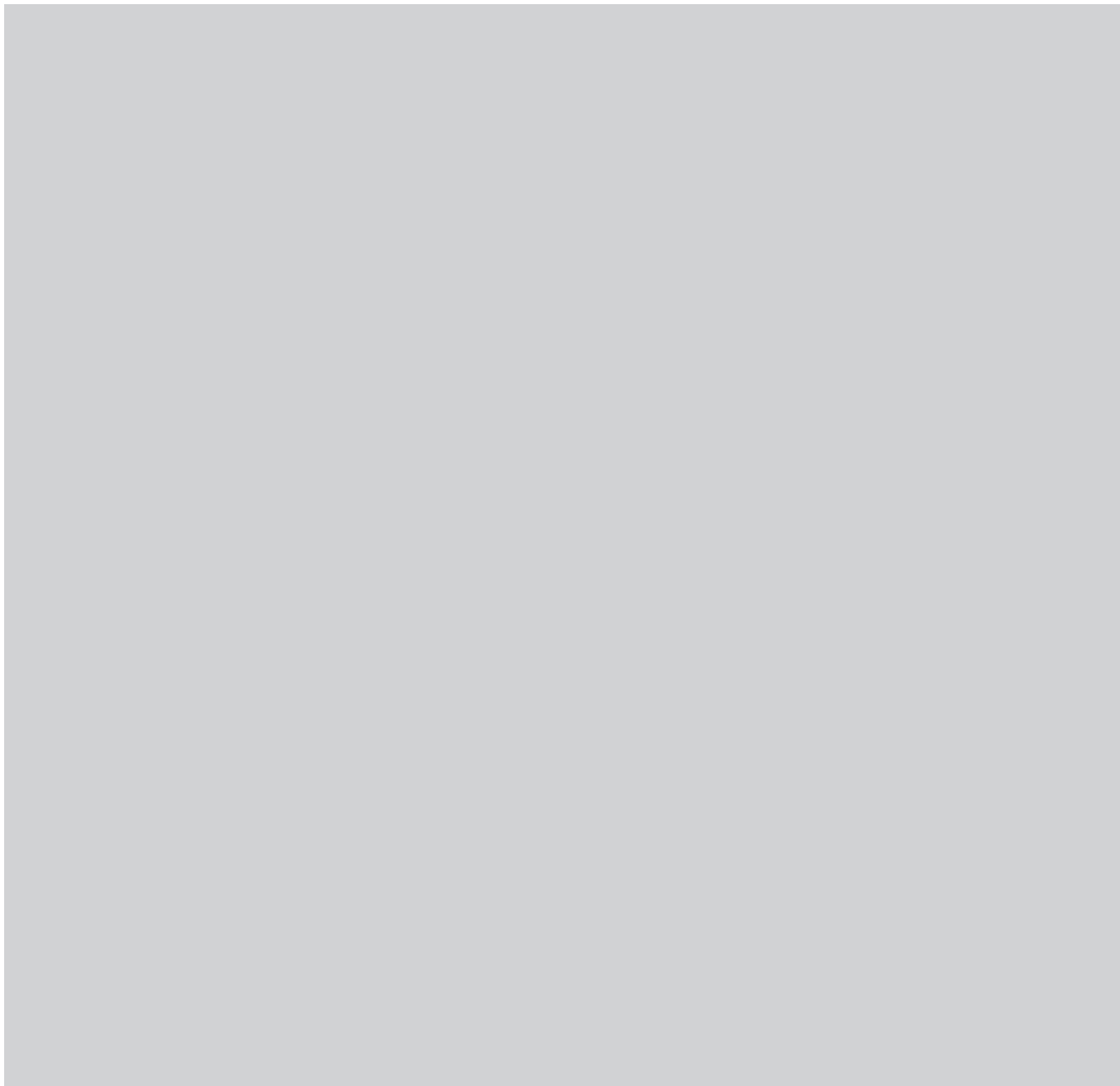
第22図 出土地不明鏡



第23図 伝伊勢出土鏡



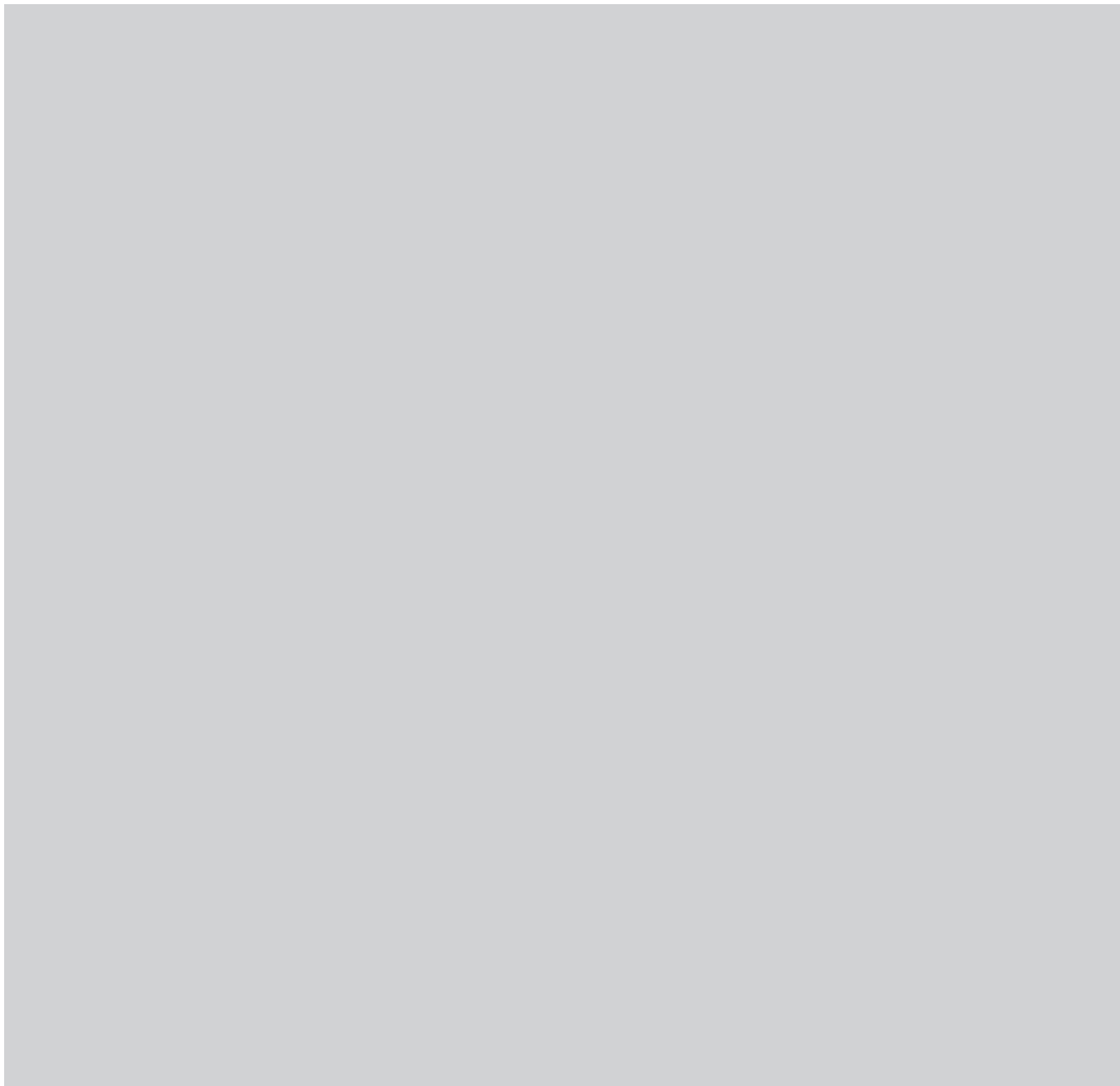
第24図 伝奈良県出土鏡



第25図 免ヶ平古墳出土鏡



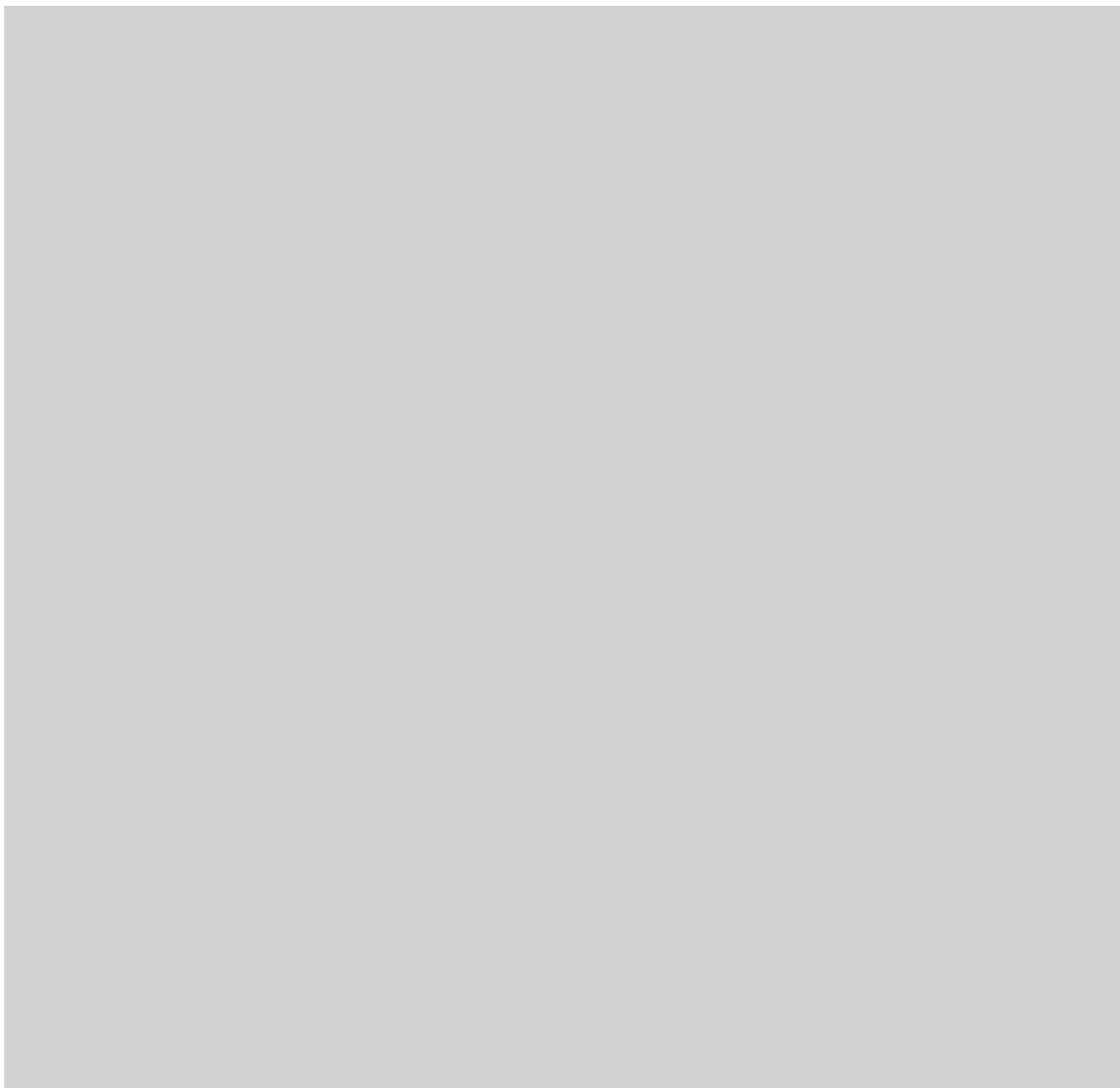
第26図 東之宮古墳出土二神二獸鏡



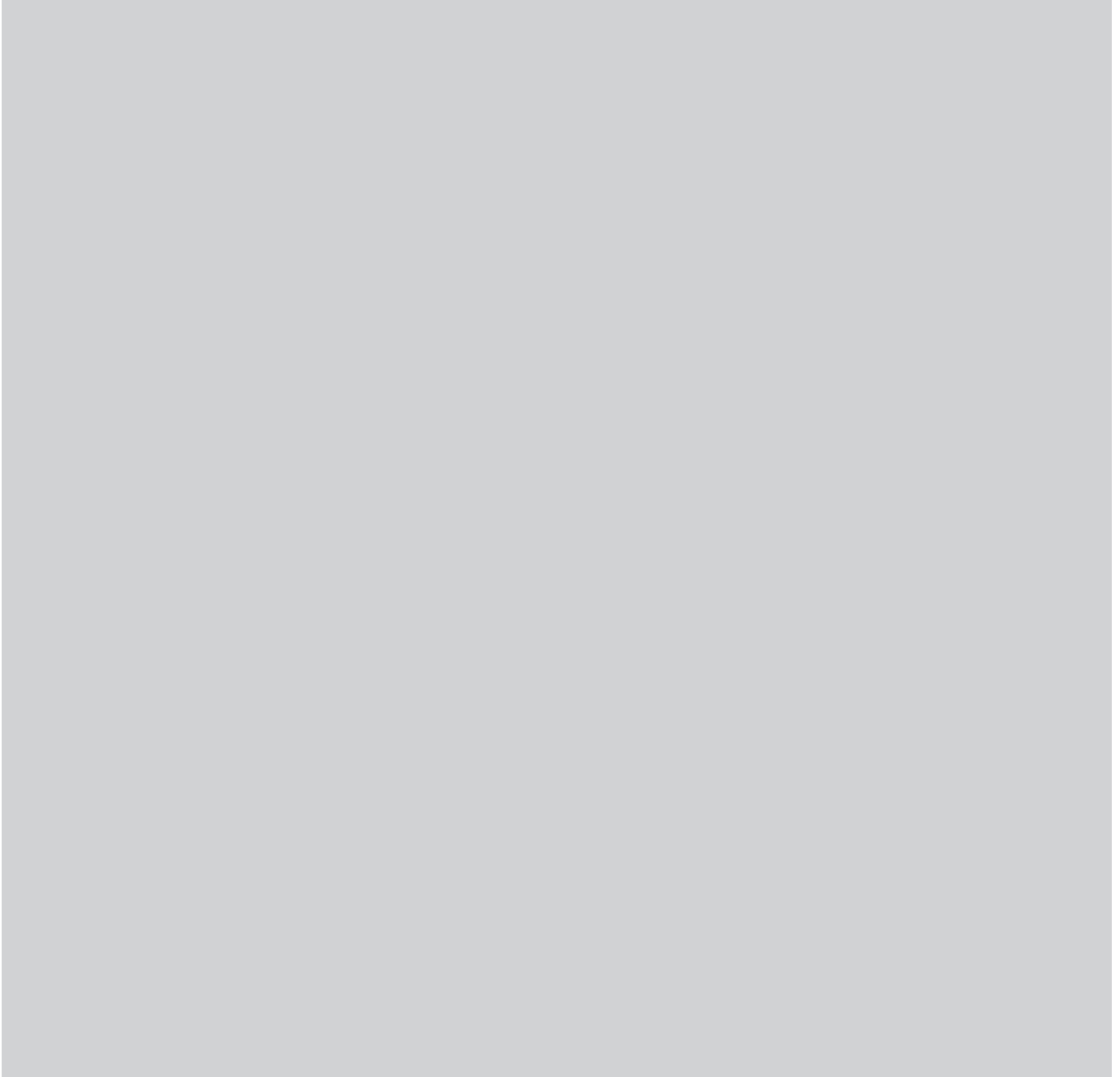
第27図 円満寺古墳出土二神二獸鏡



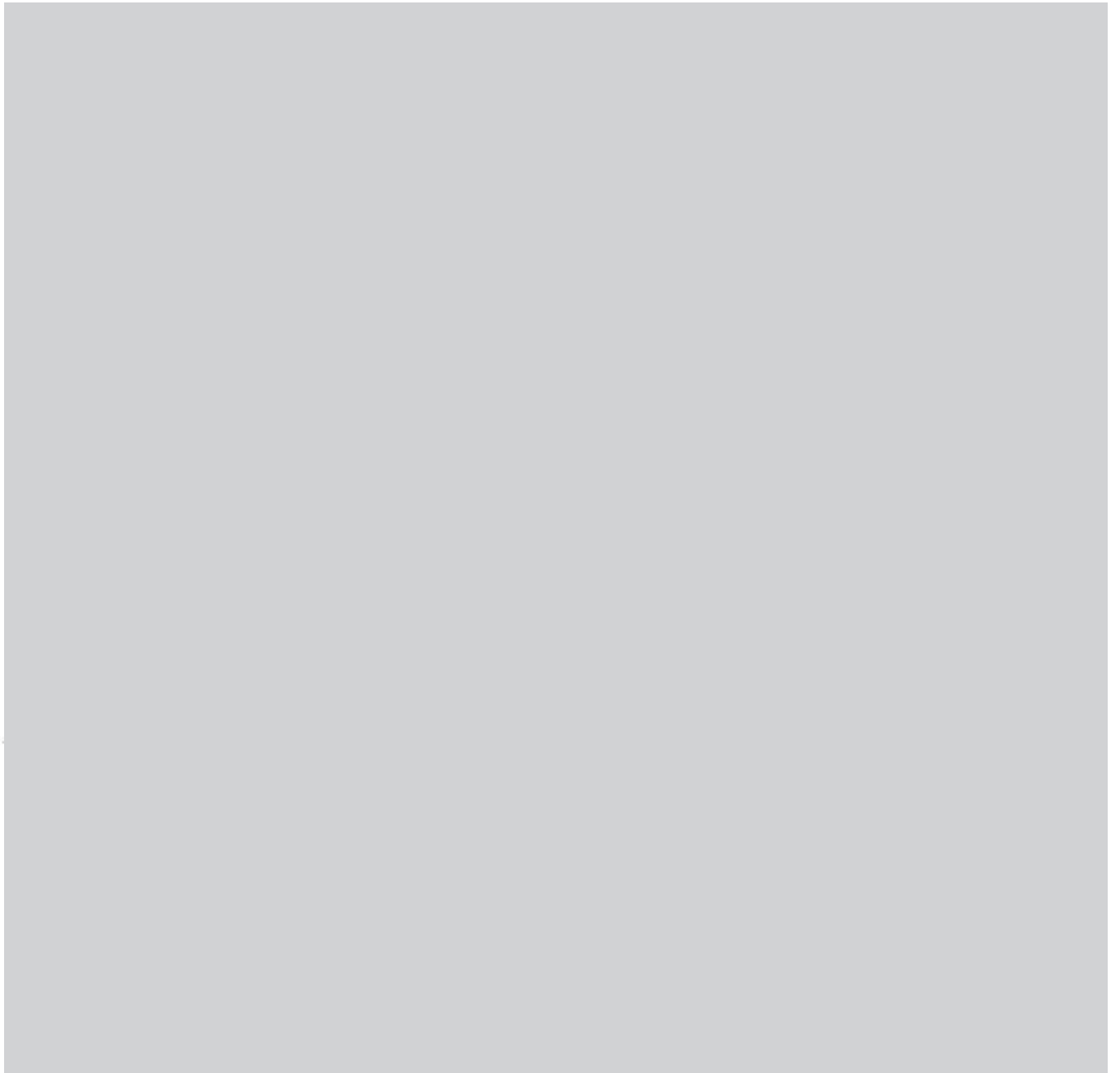
第28図 長塚古墳出土二神二獸鏡



第29図 南原古墳出土二神二獸鏡A



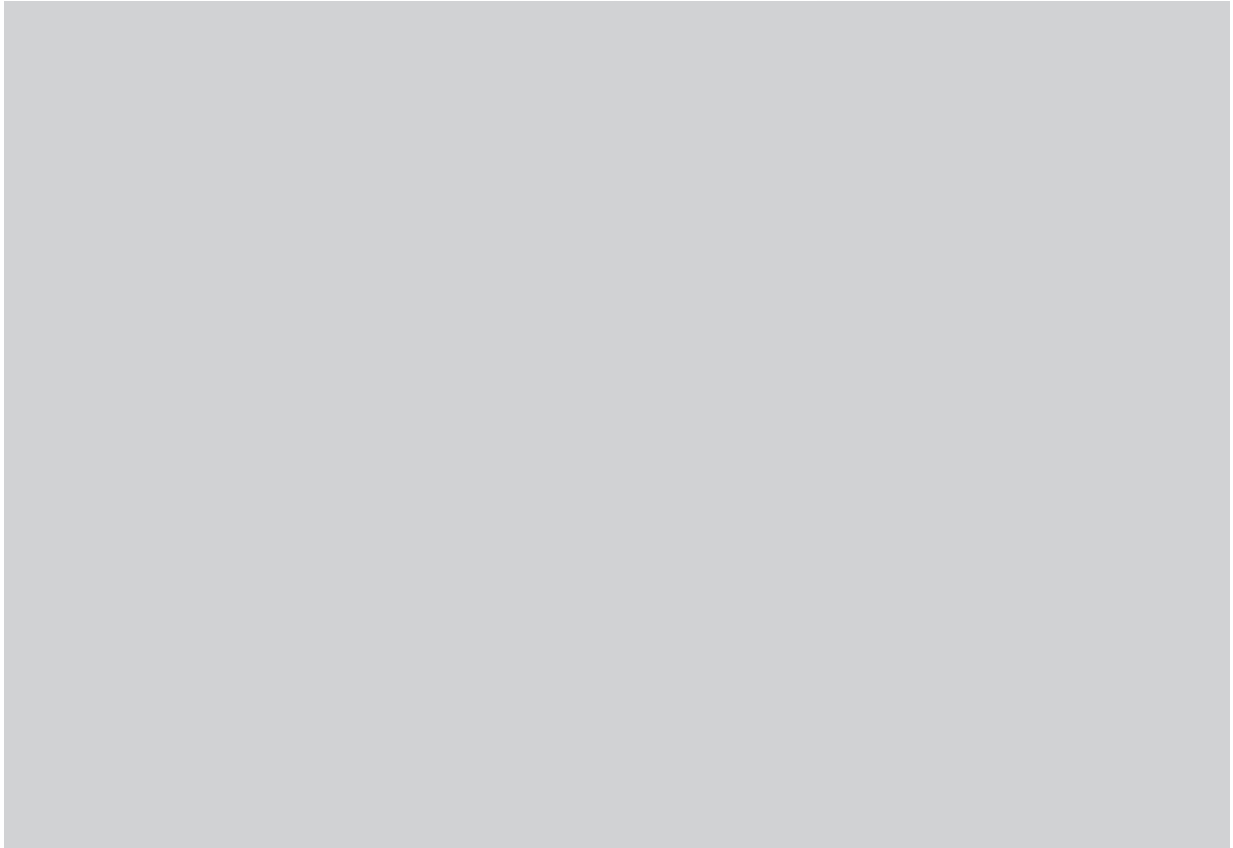
第30図 南原古墳出土二神二獸鏡B



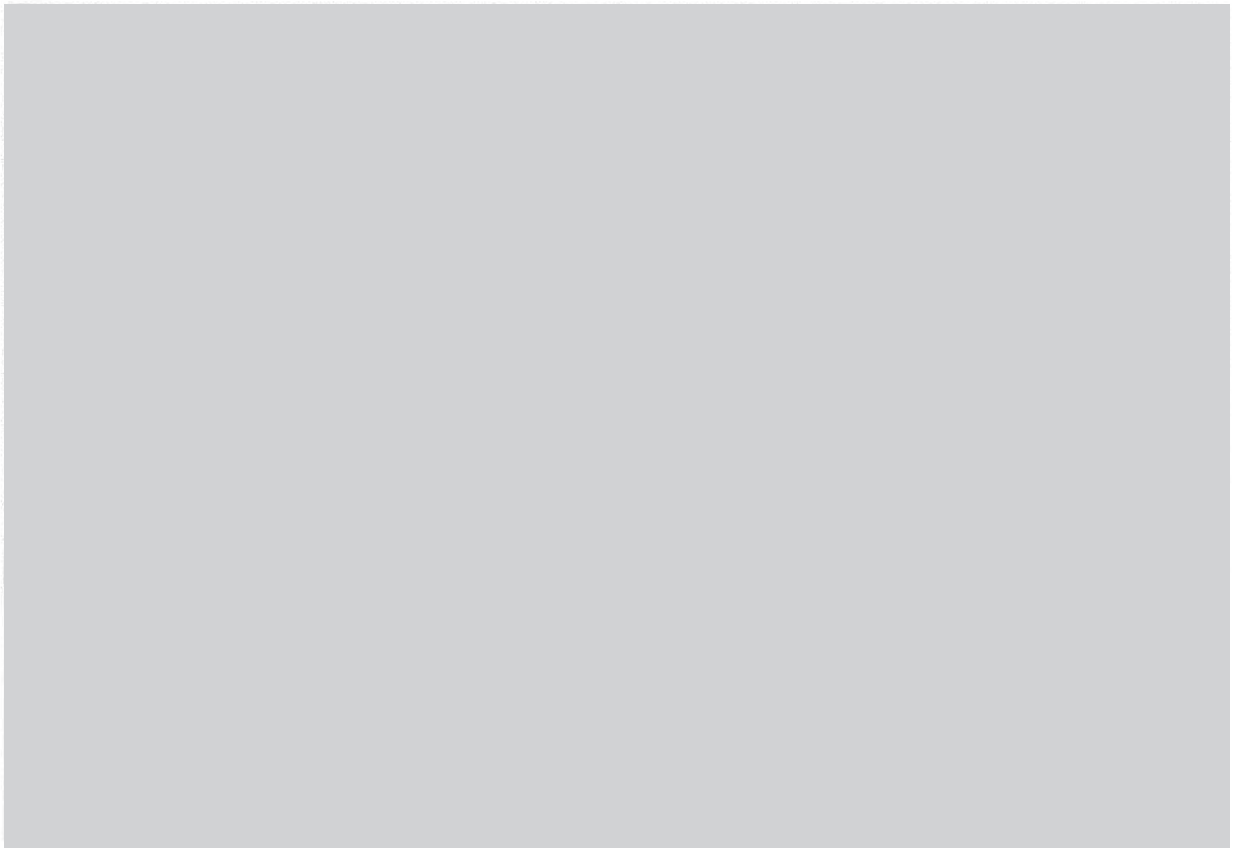
第31図 西車塚古墳出土二神二獣鏡



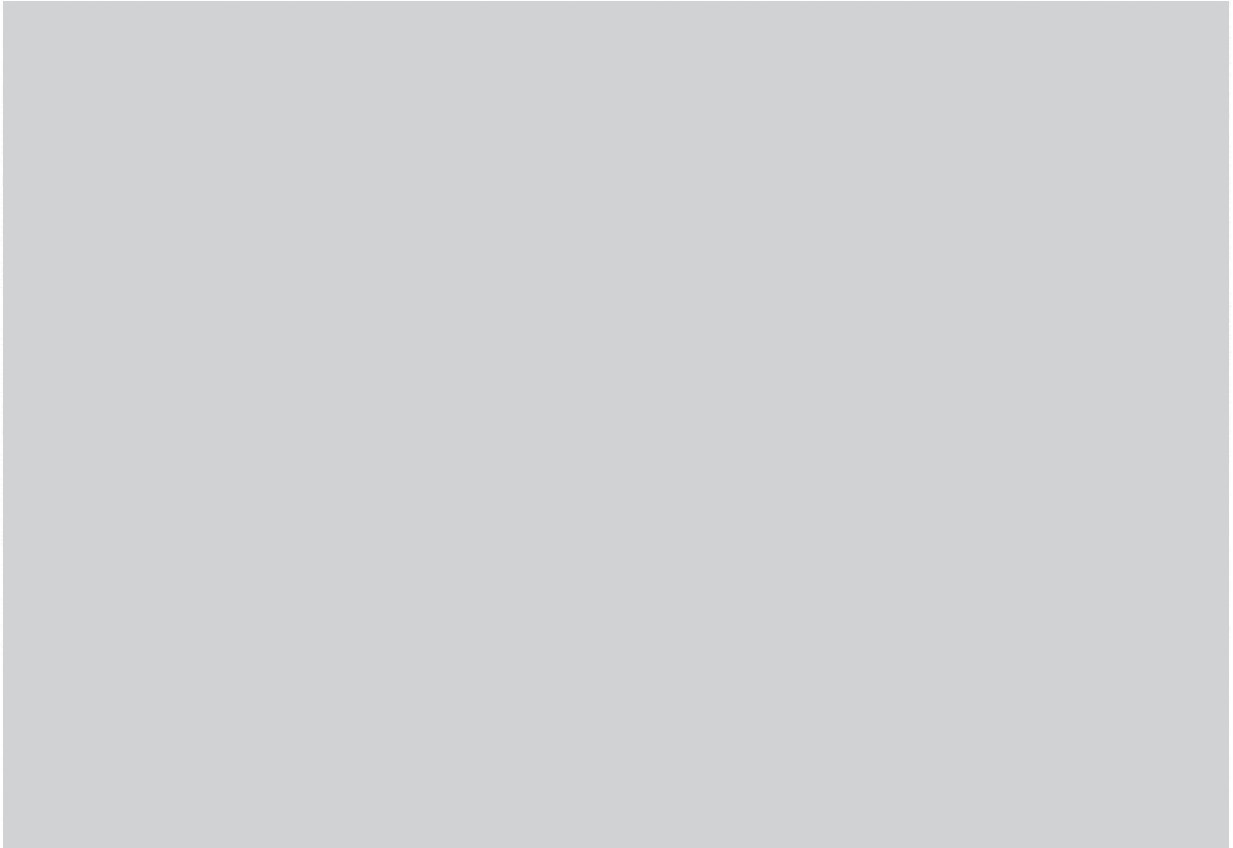
第32図 ヘボソ塚古墳出土ニ神ニ獸鏡



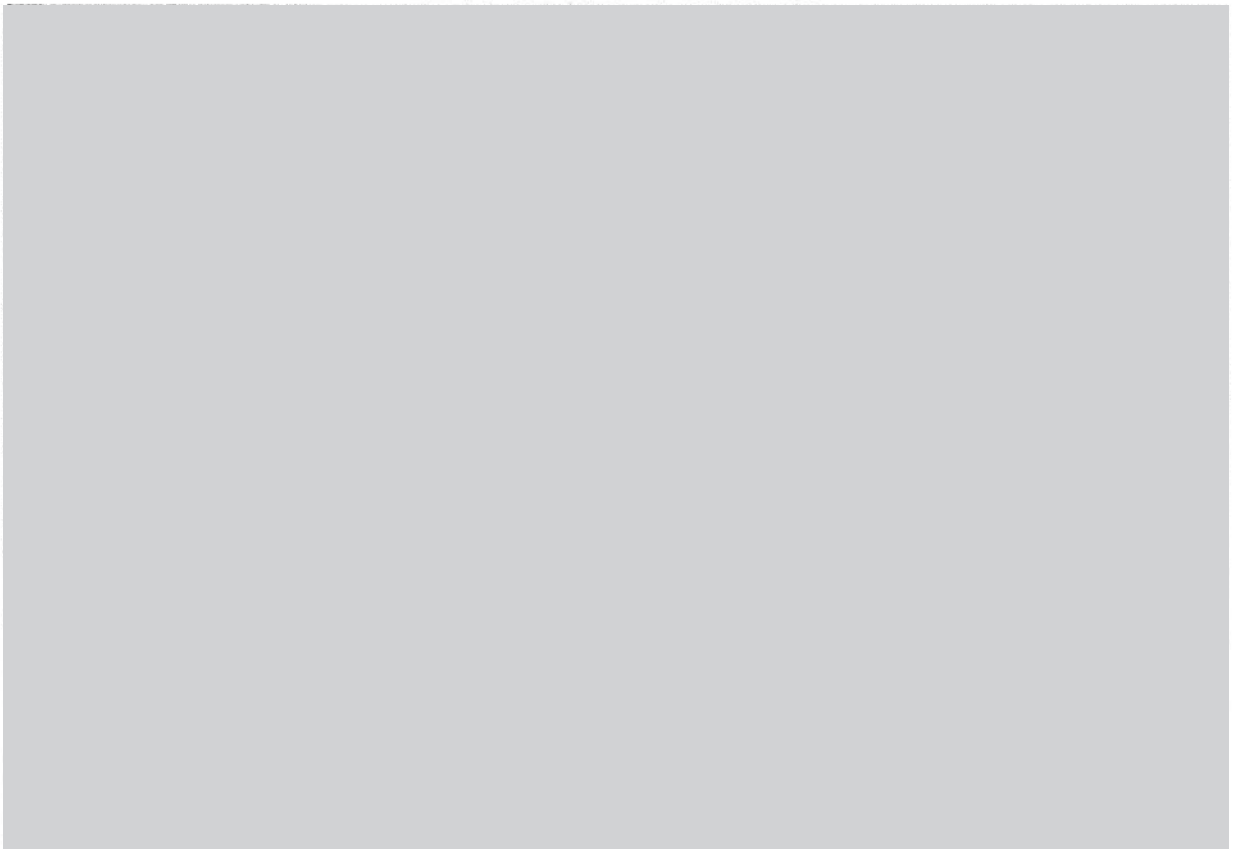
第33図 佐味田宝塚古墳出土二神二獸鏡



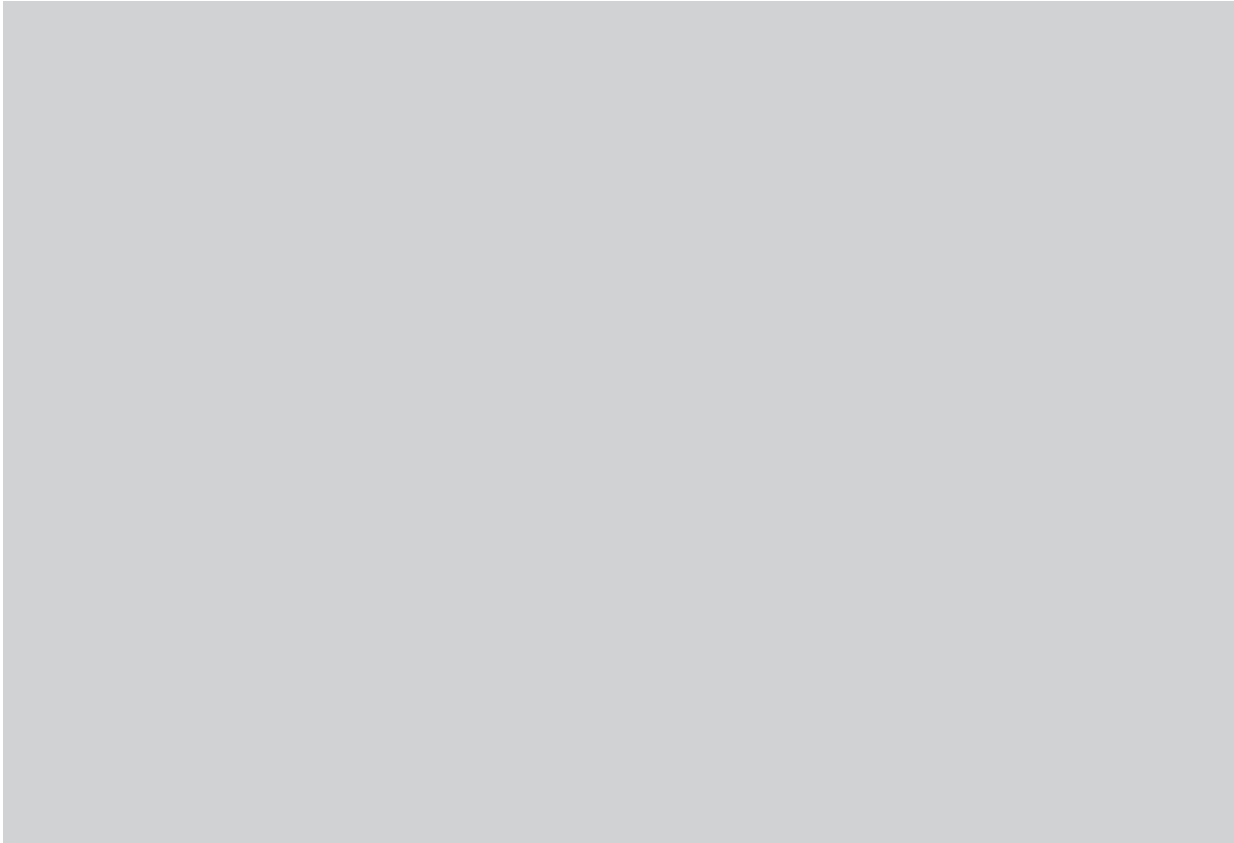
第34図 匭型亀裂痕（西車塚古墳）



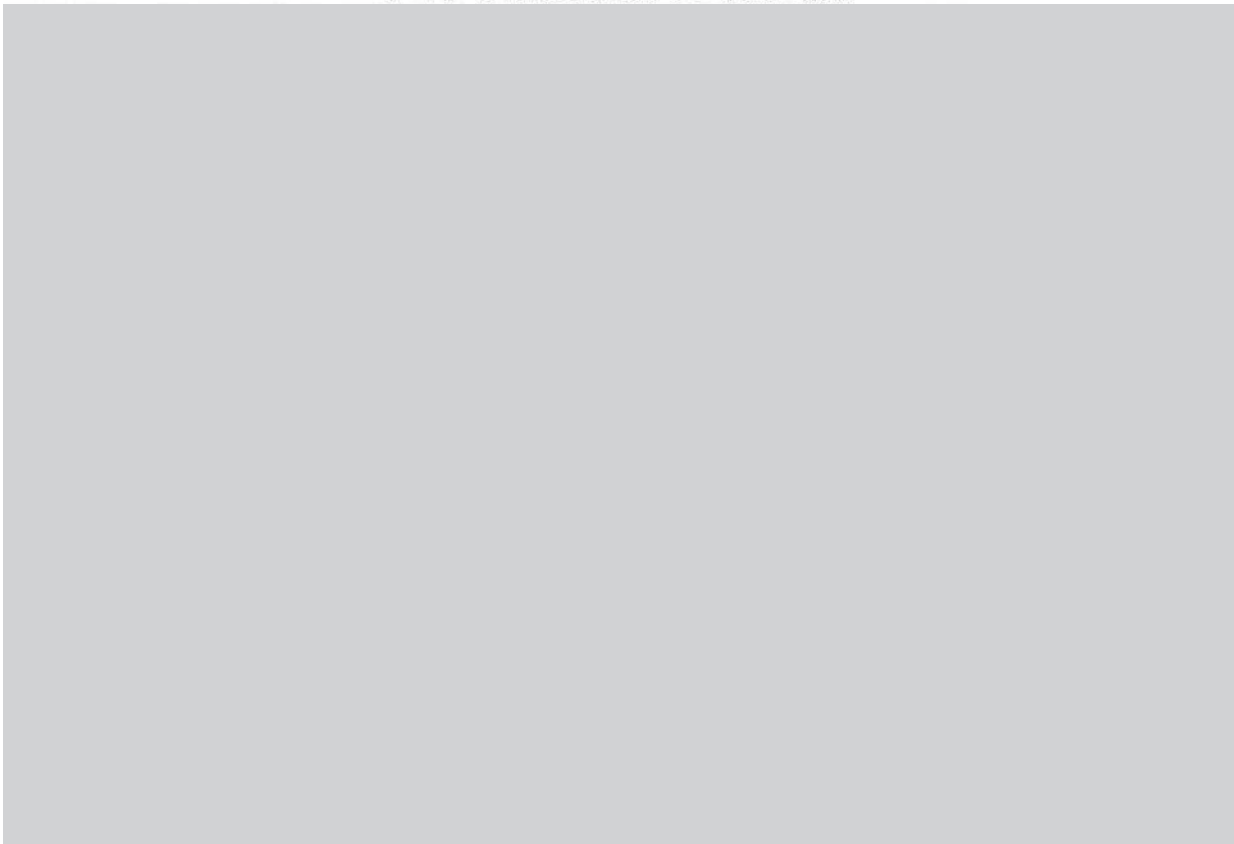
第35図 范型亀裂痕（南原古墳A鏡）



第36図 范型亀裂痕（南原古墳B鏡）



第37図 京都府長岡付近出土三角縁神獸鏡



第38図 長岡付近出土三角縁神獸鏡細部